

浄土

昭和十一年五月廿日第三種郵便物認可
昭和十三年四月二十八日逓轄省特別掛承認第三五二号
昭和十三年九月二十五日印刷
昭和十三年十月一日発行

第二十四卷

第十号

十月号



浄土の会員を一人でも多く

◇どなたでも会員になれます。

◇会費は年額四八〇円です。

◇会員には毎月浄土を配布します。

◇この会は皆様の会ですからその発展の為に

お一人でも多くの会員をつくって、正しい

信仰運動をひろめましょう。

お知らせの方にぜひおすすめ下さい。

◇お申込は振替（東京八二一八七番）を御利

用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

浄土十月号目次

表紙・扉絵

カット

結城天童

加藤金一

十夜の今昔……………武田聰洲……………(2)

修善十日十夜……………川端大祐……………(8)

念仏と道德……………林隆碩……………(12)

すずめのおはか……………内山憲尚……………(18)

秋の七草……………村上博了……………(15)

高僧伝 大島徹水上人の思い出……………吉野翠幹……………(20)

童話秋草の歌……………森正義……………(24)

偶然は必然であった……………田村健治……………(32)

三浦ミユキ夫人の信仰……………中川大仙……………(28)

運命の基……………安藤正男……………(7)

浮土歌壇……………岩野喜久代……………(31)

扉の御法語……………和訳「光顔ぎぎ文」……………(10)

仏教ものしり帖……………大陽曆……………(37)

まぼろしの城……………会員通信……………(36)

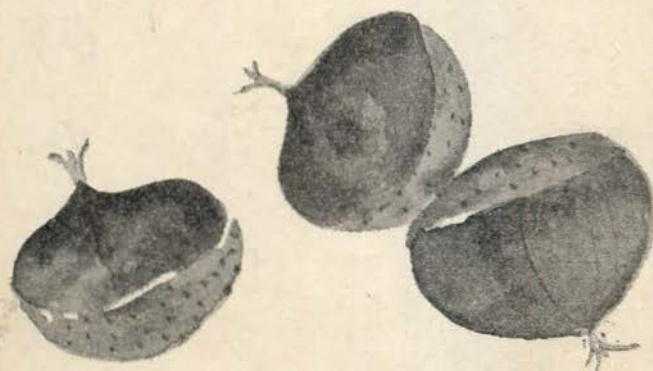
法然上人をめぐる人々……………井川定慶……………(38)

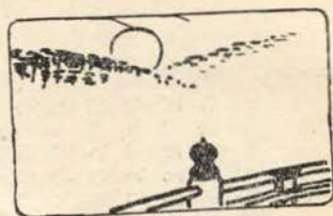
浄土

十月号

宿業かぎりありて、うくべ
からんやまひは、いかなるも
るものほとけかみにいのる
とも、それによるまじき事
也。いのるによりてやまひも
やみ、いのちものぶる事あら
ば、たれかは一人としてやみ
しぬる人あらん。

法然上人御法語





お十夜の今昔

竹田 聴 洲

(一)

京都の東山の麓にある真如堂は引声いんせいという独特の唱え方をする念仏の根本道場として古来から有名な天台宗の寺院である。室町時代の永享年中（西暦一四二九年—一四四一年）時の足利幕府の家来に平貞国たいらのまことという、平素から弥陀の信仰に篤い一人の武士があったが、或る時つらつら世の無常を感じて遁世を志し、真如堂に詣でて三日三夜の念仏を行った。念仏の信仰を励ますために、時に幾日かの時期を定めて別時念仏を行うことは、これより先既に早く浄土宗の開祖法然上人ほうぜんも懇ろに教えられた処であるが、貞国も恐らくはその風に從ったのかもしれない。三日三夜の念仏を

終え、今にも剃髪して僧形になろうとした時、夢枕に一人の僧が立って、彼の深い信仰心をほめ、剃髪のこととは三日を待てといったので彼は遁世を思い止った。ところが図らずも、兄の失脚によって弟の彼が家督を継ぐこととなり、その後は家運すこぶる繁栄したが、たまたま瑞夢のことが上聞に達し、ここに三日三夜に続いて七日七夜の念仏を行い、この儀によって十日十夜と名づけてこれを寺例としたのがいわゆる十夜の起りとされている。（真如堂縁起）それから五十年ばかりした明応年月（一四九六年）の十月、これも名刹である鎌倉の浄土宗光明寺の観音上人は、時の後土御門天皇の召を奉じて京都の宮中に真如堂十夜法要の式を営み、大いに天皇の御感を得、勅によって許されて光

明寺にこの法要を移し行い、その後永く浄土宗各寺院の定例法要となったという。

十夜の法要は一般に浄土宗の寺院を中心とし、又天台宗の寺々でも行われているが、とりわけ京都真如堂や鎌倉光明寺では古来盛んにとめられてつとに世の名物ともなっており、又十夜には広く各地の寺々でことさら引声阿弥陀經・引声念仏の詠唱が行われるのは右のような由来に基くのである。

もともと御十夜は十日十夜という言葉略したものであり、十日十夜の別時念仏という意味に外ならない。そして右に述べた御十夜の始まりを説く物語りが事実であるとしても、いわゆるお十夜の念仏法要が江戸時代（一六一五—一八六七年）から民間に広く行われたのは、今一つ別の事情が民衆の生活の側にはあったのである。

(11)

お十夜は陰暦の昔から必ず十月と定まっていた。ただ十日十夜の別時念仏というだけのことなら、一年中のいつ営まれてもよさそうなのであるが、実際は決してそうでなく、全国どこでも必ず十月、それも十月六日から十五日までの十日十夜という日取りにきまっていた。

丸なる月を数えて十夜かな

也有

これは江戸時代中期の俳人横井也有の句である。陰暦の制では毎月十五日はいうまでもなく満月の日に当るから、十夜は初冬十月初旬、細い弦月が空にかかるころから、月が一日一日丸味を増して恰度真丸い満月になる時に当り、この也有の句には、毎夜の法要がすんで寺から帰る途すがら、思わず空にかかる月をみて、ああ今日は十夜の幾日目だと思わずにはいらなかった深い実感がこめられている。又この句によっても知られるように、江戸時代には十夜は十五日まで十日間毎夜つとめられるのが一般の風であった。十五日の望月の日を満願としてその以前十日間にわたる夜の行事であるお十夜には、弦月から満月まで一日一日肥大してゆく月光が添える情趣は欠くことの出来ないものであった。

極楽はいつも月夜に十夜かな

浪化

もろ／＼の愚者も月さす十夜哉

一茶

このように、十夜を詠んだ江戸時代の俳諧の中には、白々と初冬の月光に濡らされた風情を大きくとり上げているものが少なくないのもそのためである。

十夜は昔から俳諧の上で十月の季題となっている。この十夜が十月ということは無論誰が何時決めたというも

のではない。平貞国が真如堂に創行した時のことはともかくとして、観音上人が明応四年宮中に修し、続いて浄土宗各寺院通有の法儀とされた時にはすでにそうであつたらしいが、その理由については何も語られていな。江戸時代の民衆もそれについては特別に問ひ糺すこともなく、ただ前々からの習わしとして之に従つたのであらう。明治以後陰曆（旧曆）が改められ新曆の制に従ふことになつて、現在では十夜は多くの土地で十一月の行事となり、期間も五日間とか三日間とか、あるいは僅か一日というまでに簡略化されているが、それでも大ていは十四日の晩あるいは十五日を当日又は最終日としているのは、いうまでもなく旧の十月十五日を一カ月おくらした積りなのである。独り十夜に限らず、一般に民間の年中行事はすべてもと旧曆によつて日取りが立てられていたのであるが、これが明治以後新曆に切りかえられるに當つては、旧曆上の或る月日の行事をそのまま新曆上の同じ名の月日に引き移した処（十夜を新曆十月十五日につとめる類）と、前述のように機械的に一カ月おくらすことにした処とがあつた。新曆は旧曆より大体一カ月おくれることが多いから、旧曆某月の行事を新曆上の同じ名の月に引き移すと季節感の上で約一カ月のズレを生ずる。新曆十月は大たい旧曆の九月に當るが、旧曆

九月はまだ晩秋であつて初冬ではない。しかし旧曆の制によつた江戸時代などでは、十夜はどこまでも初冬のものであり、初冬の季節感を盛つた年中行事としてこそ独特の風趣と意味をもつたのである。

禪門の皮足袋おろす十夜哉

許六

藪寺や十夜の庭の菊紅葉

几董

新しい皮足袋をはき、菊や紅葉に寺庭が彩られる季節の行事がかもす風情は新曆十月では味われるべくもない。

それに比れば一カ月おくれの方がはるかに季節感には忠実である。新曆十一月は大概旧曆十月に相当するから、新曆十一月につとめられる十夜は旧曆時代の十月の十夜とその季節感の上でそれほど差違はない。しかし月の満欠けと日の数え方とを全く無関係におく新曆の制では、月の十五日は別段満月の日とは限らず暗闇のことも珍しくない。そこには月かげに彩られた昔の十夜の風趣は全く失われた曆制の変化は旧の民間行事がもつた俳味を奪ひ去らずにはおかなかつたのであつて、十夜もその例外ではなかつた。そして十日の期間が三日・一日に短縮されるに至つてそれは猶更であつたが、そこには信仰心の衰退と共に世の中の忙しくなつたことも与つていよう。

(III)

十夜とてかしこき法の教かな

梶良

梶良も江戸時代中期の俳人である。双盤の鐘を叩いて会衆一同が声高に唱える引声念仏と共に、江戸時代から十夜にはことさら説教・法談の行われるのが例であった。さきの浪化や一茶の句も、それが、浄土門の教義によって或は極楽往生のいわれを説き、或は念仏によって愚者の本姿にかえることを主旨としたものであった情景をよく物語っている。又念仏しながら夜を徹して寺の本堂に参籠することも広く行われ、参詣者一同に小豆粥の御齋の供されることもあちこちで十夜法要の特徴ともなっていた。十夜の時節は恰度新穀のとり入れがすんだころに当るが、この粥がその年の新穀で作られることはいうまでもない。

「今日（十月六日）より十五日に至る迄、浄土宗寺院十日十夜の法要執行。此の間、説法・別時念仏等ありて参詣多し。今日を十夜紐解と云ふ。十四日には籠りなどあり、此の間、俗家にて法事をなす。」

（東都歳事記）

「（十月）六日より十五日迄、浄土宗十日十夜の説法並に念仏これ有り。檀那寺へ十四日の夜は通夜仕り、

十五日は齋に招かれ申候。」（丹後峯山領風俗問状答）

「浄土宗の寺にて十夜の間、談義これ有り。十四日の夜、参籠一夜あかし候には粥・小豆を給させ候。十夜粥という。」

（大和高取藩風俗問状答）

独り東都（江戸）・丹後（今の京都府北部）・大和（今の奈良県）に限らず、広くその他の土地でもお籠りと小豆粥の御供養は十夜のつきものであった。そういう風習を背景としてこそ

夜もすがら小豆煮え立つ十夜哉

静江

といった句も、十夜の夜の寺の情景を生々と描いたものになるのである。現在でも小豆粥・甘酒の類を十夜の参詣者に供する土地は多く、近畿の各地ではこの日、家々で牡丹餅（オハギともいう。小豆を甘く煮て握飯にまぶしたものの。小豆粥と材料は同じ）を作つて或は寺に持参し、又寺から予め配られた十夜報謝袋などという紙袋に一升ほどの新米を入れて各檀家から寺に施入する風習が広いが、それらがいずれも收穫早々の新穀から作られることが特に注意される。即ちお十夜は単に別時念仏の機会という以上に、又新穀感謝の時でもあった。

經典の中には、十夜を十月に行えというようなことは何処にも書かれていないのに、実際にはこれが必ず十月でな

ければならなかったのは正しくこのために外ならない。ただそういうことを誰も意識立って知ろうとしなかったまでである。

十夜にはまた諷誦ふうじゆといつて、長文の供養文を独特の節で読み立てて亡き有縁の靈を弔う風が昔から各地にあった。

「十夜。夜に入つて宗門の男女群集、各々高声に弥陀号を唱う。凡そ淨土宗の寺院に法談あり。其の始め多く永諷誦を読む。」
(日次紀事)

これは江戸時代も早いころの京都を中心とした土地の風景であるが、固よりこの地方だけの風ではなかった。今でも長崎県・福岡県・神奈川県を始め北九州や関東の各地では十夜に盛んな諷誦供養が行われ、十夜といえは諷誦、諷誦といえは十夜が連想される程で、一靈の供養に米一俵、二百人三百人の勧進の施主がつくことも珍しくない。つまりそれらの土地では十夜はまた亡靈供養の大切な機会でもあったのである。

(四)

仏教的にみれば、お十夜はいうまでもなく念仏の別時會であることにその第一の意義がおかれる。しかしこれを民間行事という側からみる時、時期その他種々の点で、そこ

には仏教と直接関係のない風習が結びついている。それらは多分十夜が念仏法要という形で創められるずっと以前から民間の生活の中に持ち伝えられたものであろう。昔の人々は米の豊かな稔りをとりわけ先祖の恩徳の賜物とし、新穀は何よりも先ず神に捧ぐべきものと考えた。曆の普及しなかった時代には諸事の日取りは月の満欠によって算定するのが便利であつたが、大切な神祭の日は、ことに印象的な満月の日に当てられることが多かったこと、神祭には身の精進を期するために前夜の參籠を常としたこと、晴の行事である神祭の日の食物はもともと神への御供物という意味をもち、そのため平生の食物とはことさら種類の違つたものを作らねばならなかつたこと、その中でも小豆飯は最も代表的なものであつたことは、今も民間各地の風習の例から遡つて考えれば、極めて古い昔からの仕来りであつたらしい。

ただそれらが十夜念仏の風習の中に取り入れられて、全く仏教の行事のようになったのはいうまでもなく布教の力であつた。

(同志社大学助教授。史学・民俗学)

或る朝、私はいつものようにポストから朝刊をとり出し展げて見ると、その第一頁には大きく全日空旅客機の遭難が報じられていた。そして乗客の氏名を辿って行く中、或る活字の上に、私の両眼は固定して仕舞うのだった。そこに社の池田部長の名を発見したからである。その前夜七時五十三分羽田発、部長は中部支社の配給会議出席のため、東京を離れたのだったが、不幸にして塔乗機は下田沖で消息を絶ち、十三日の正午頃には全員三十三名の絶望が略々確定してしまつたのだ。テレビのニュースは捜索隊の活動やら遺族の悲しみ、そして

最後に痛ましい遭難者の姿など生々しく伝え、今更のように人間の脆さ、儚さが感じられる。翌、十四日には同氏の遺体も発見、確認され、伊豆下田浄土宗海善寺に安置された。悲しみの通夜もあけて茶毘の後、品川駅頭に遺骨を迎えたのは十四日の夕五時であった。関係者の話に耳を傾けると、何か我々は「運命」と言う大きな絆に、恰度傀儡のように操られているような

運命の碁

安藤正男

気がしてならない。そんな事が私に、同氏の出発前後の事など静かに回想させるのだ。(-)本来なら迎も間に合わなかった切符も、知るべを頼ってやっと手に入れた。若し入手の術がなかったら——(運命は又別のコースを辿った事であろう)(-)出発に際し、乗用車が遅れて随分時間を心配していた間、若し飛行機に乗りおくれしていたら——(勿論同氏は今尚健在でいるに違いない)

げているのだ。今日の本陣の一石は因となつて、明日の果を生む事であろう。因果こそ不離一体である以上、我々は常に慎重に現在を処理して行かねばならない。

七年から九年の長い間地中に眠り、陽の光りを見てからは僅か一週間の短い蟬の命然し我々の寿命とて悠久永劫の年月から見れば何の異るところがあろう。まして生存と不測の惨禍とが、絶えず表裏一体となつてゐる事を憶う時、「現在に励む」と言う事を痛切に感じたのである。

以上は最近私の身近に感ぜられた人間の儚さであるが、之は生きとし生けるものの誰しもが負う可き宿命でもあろうか。この稿を草していた今も尚、過半数の人達のみたまは海底深く眠っている。その方々の遺体が一日も早く故山に還れるよう、そしてその御冥福とを心から祈りして、この虎筆を擱き置かうと思う。

——一九五八、八、一五——

(筆者、日活本社勤務)

修善十日十夜

川 端 大 祐



——てんしょむしょう——

新潟から五〇〇トン級の「おけさ丸」が「こがね丸」に乗って三時間、両津港に入る三十分前に船は水津部落に寄港する。

部落は五十戸そこそこで後は切り立った岩山、前は海に面した片側に家が並び狭い一本道の淋しい漁村である。

いつ頃、どんな和尚が布教したのか、当時

四十戸足らずのこの村で一カ寺を後の高台に建立して誓願寺と名づけた。以来、信仰深い佐渡一円でも特に念仏信仰の部落としてその名が高い。

村の休日には全村寺に集って楽しみの「念仏」が催される。カネと太鼓の音にぎにぎしく、老も若きも今にも踊り出しそうないせいのよい念仏合唱に全霊を打ち込む姿はまことに勇ましく無念無想の極地である。

他に『のろま人形芝居』『なにわ節』『お説教』『紙芝居』等、都会から忘れられたこの村にもこうしたレクレーションはある。すべ

て寺が会場である。こざっぱりした地味な着物に、真新しい手ぬぐいを腰にぶらさげた老人等が百段に近い坂を登って誓願寺参りをする姿は、この世のお浄土参りにも似て至極平穏な風景である。

この村の十夜法要が又変っている。全村、老も若きも夕方から寺につめかける。先づ庫裡の帳場で好きな番号札を幾枚か自分の財布の都合をきいて買う、たとえば五十番から五十九番迄の十枚を十銭出して引き替える」と云う様に。

例のカネと太鼓に合せた念仏大合唱が終る頃本堂は全村三百余人立錫の余地もないほど満員となる。やがて仏供養の諷誦文の朗唱が集った僧等によってしめやかに行われる。終ると皆が待ちに待った「てんしょむしょう」が始る。

色の白い背の高いいつもこに顔の住職章道和尚がさあ始めるかなとゆったり高座に上る。高座のわきにしまつてある賞品が次々に出されると会場に緊張がみなぎる、和尚の

手の簞箱が「ガラガラガチャン」と鳴る。

『十五番ノ』と和尚がどなると片隅から「ハ—イ」と黄色い声や洞間声の返事が、悲喜交々にどよめき始める。

高価な反物が出たり、わづかにマツチ一箇に過ぎなかったり、その度毎に歡喜と悲觀の交錯である。

いわゆるこの当り簞の余興が「てんしよむしよ」なのである。

人々は法衆と、スリルの中で亡者の吊いと運、不運の因縁和合の道理に徹するかの様な姿で夜の更けるのも忘れるのである。

「てんしよむしよ」の語義を私は知らない、ただ四十年前の少年時代の印象深い故郷の十夜法要が夢の様に思い出される。母の遺言で出家し、一山の住職として越路の田舎寺で十夜法要を勤める身となって始めて仏のふところに無心に抱かれていた幼少のあの頃がたまたまなくなつたしいのである。「てんしよむしよ」と十夜。法要に無関係なこんな余興も、気のきいた何代目かの誓願寺住職が人集め、布教の強化の為に考案したものである。

—— 広く徳本を植えよ ——

無量寿經下卷に「當下求度世一拔斷生死衆惡之本。當離三塗無量憂長苦痛之道。汝等於是廣植徳本。布施惠施。犯道禁。忍辱精進。一心智慧。転相教化。為徳立。善正心正意。齋戒清淨。一日一夜勝。在無量壽國。為善百歲。所以者何。彼仏國土。無為自然。皆積衆善。無毛髮之惡。於此修善。十日十夜勝。於住方諸仏國土。為善千歲。所以者何。住方仏國。為善者多。為惡者少。福德自然。無造惡之地。唯此間多惡。無有自然。……云々とある。

此の世に於いて広く徳の本を植え、恩恵を布施する事が僅か一日一夜であっても、無量壽國即ち仏の國、極樂世界での百年間の修業に勝ると説かれてある。その理由如何となれば仏國の環境においては福德自然にして、髪は毛ほどの惡を為す者がないから、善をなすにも苦勞がいらないからだと釈しているのである。

つまり平和な田舎では喧嘩沙汰や盜難訴訟などある筈もなく、純朴な善人なることに何の不思議もなく苦勞もいらない訳であるが、殺

伐な都會では売られた喧嘩は買いたくもなろうし、巾着切りに会えば憎しみの情にさいなまれ、人にだまされれば自然に人を疑う惡趣輪廻の世相となって廢惡修善が如何に困難であるかを説いているのである。

都會だけでなく田舎も近ごろは人心が荒み善を為し、惡を斷ずることは仲々至難の事となった。近年私の寺の十夜法要にさえも夜半参詣人にまぎれて、賽銭を盗むどろぼうが立ち入る状況となった。此の世に於いて如何に惡を為すは易く、善を為す事難いかがわかるのである。

一日一夜の修善が百歳の修業に勝り、十日十夜の善根が千年の積徳造善に匹敵すると説かれてあるも故なきではない。

—— 十夜法要の起原 ——

十夜法要の起原は十五世紀のなかば、後花園帝の時代足利八代將軍義政の執權平貞國が始めたと伝えられている。

京都東山真如堂（天台宗）に於いて三日三夜の願をかけ、万願の日大いに利益を得た貞國は感激のあまり、続いて七日七夜、総べて

十日十夜の会仏を修したのがその源であり、以来毎歳十一月六日より十五日に到る十日十夜の大法要が慣例となったのである。

続いて次の後土御門帝は仏教の篤信者で阿彌陀經の講説者を全国の学僧中に求めた。當時浄土宗関東總本山であった鎌倉光明寺第八世観養裕崇上人が、この講師に選ばれて好評を博し、帝の御感一方でなかった。

時に帝より所望の品を何なりと申せと問われ、観養上人は「浄土宗でも真如堂の様に十夜念仏会を宗定法要として行わせて頂きたい」と答申した。帝は即座に勅許になり以来光明寺を始め浄土宗独特の法要として全国に行われる様になったのである。

秋の収穫の好季節が選ばれて、この十夜別時念仏会が農村では楽しい行事の一つとなつて今日に伝わった次第である。

仏教の隆盛修善は浄土宗に於いては念仏の一行に尽きる。而し別時念仏の行は初心には仲々つき難い所があるが十夜の別時は、民間の楽しい行事としてレクレーション的な意義も大きいので大いに別時を盛んにしたものである。別時念仏もただ困苦しい説教と、苦

行に近い遍敷にこだわる念仏では、初心に辛行であるが、実りの秋の一夜、適当なレクレーションを交えての農山漁村の十夜法会は一輻の俳画にも似て心温るものがある。

人声の小寺にあまる十夜哉

召波

――十夜戻りの小提灯――

彼岸が終わる頃からぼつぼつと十夜の「誦論文」の申込みが私の寺では始まる。私の寺は街並二百軒、在方二百軒計四百が固定した檀家であるが、十夜誦論文の申込みは殆どが在方であり、而も檀家は少く他檀の信徒が大事である。それも三、四里離れた遠い山里の者が多い。山の中から綿入れや毛布を背負った老若が一夜のおこもりを楽しみに町に出かける姿はほほえましい。

夜を徹して百二、三十本の誦論文が読み上げられる。随喜寺院十二カ寺中、声と朗唱の技巧の秀れた者五、六人が莊重に、しめやかに一本を読み上げ終ると万堂の参籠者等が念仏を唱和する。誦論文の文例一、二を挙げてみよう。

扉の御法語

病氣はすべて因果応報によって生ずるものであるから、病氣になっていくら神や仏に祈ったからといって直るものでない。もし神や仏に祈って直るなら、病氣をしたり死んだりするものが一人もある筈がない。宗祖上人がその当時こゝう断言なさったことは偉大と申すより外はありません。医学が進歩した現在ですら、病氣になって神仏に祈る者の多いことを思うと、上人の言葉が当時どの位の意義があったか想像以上だと思います。

この御法語は、「浄土宗略抄」の最後の所に出ています。申すまでもなく「浄土宗略抄」は庶民に示した浄土宗大要です。浄土門の意義から説きおこし、三心を説き、正行を示し、念仏信者がいかに十方の諸仏から護られたすぐれたものであるかを教えています。善導大師のお言葉や諸經文を引用しながら、念仏を唱うる者は、八十億劫の重罪が除滅されとか、二十五菩薩を初め無數の仏念しに護給うとか、日常生活に

(一)

……夫れ以みれば、諸行無常の春の花は是生滅法の嵐に散り易く、生滅に己の秋の月は寂滅為楽の雲に隠る。今正に吊う霊位は施主が為には妻なり、……郡……村某々の妻こと俗名は○○戒名は○○○○信女と号す。然るに昭和○○年○月頃より病にかかり○月○日行年○○才を一期として相果てたまい畢んぬ、嗟呼片鳥独残りて年約を違う事を悔ゆ。新陵骨を埋めて千契の媒を哀む、反魂香影索むるに容易ならず、菩提の戒香至信を興し深重の功德之徒を追除し亡霊速かに覺位に登り三明の通風愛夫親族に回布し玉え。誦する所の諷誦文件の如し。施主は精霊の夫○○村某敬って白す……

……つらつらおもんみれば、念仏の妙行は末世有像の妙業、重罪消滅の秘法なり、故に六方恒沙の諸仏の同心証城なれば、十方の衆生の疑いを広く散じ、兆載修行の大善なれば、五逆謗法も草露と消え、平等無上の大願は善惡共に引接し給う。今正に吊う精霊は……嗚呼悲哉無常の嵐は時をきらわず、殺

鬼機嫌を同はず、人命も亦風前の燈の如し亡霊生前の事共を思い徒らに悲しまんよりは如かず一通の誦文を捧げて本夕參詣諸人の念仏同唱の功德によって亡者の菩提を吊はんには。仰ぎ願くは仏力加護し精霊疾に安養淨刹に入らんことを……

庫裡の出店も今夜だけは終夜営業である。駄菓子屋、おまん十屋、そば屋、くだもの屋小間物店、等客引きに余念がない。

信者は睡くなるとそばを食べたり、ナシをカジったりしてねむけをさまし、自分の諷誦文の番を待つ。自分の諷誦文の番がくると焼香して、夫々毛布や綿こにくるまって思い思いにまどろんで夜明けを待つて寺を出る。

腰を曲げた老人、手を引く娘、とぼとぼと二里、三里の山道を三三、五五と帰途につく。庫裡の出店で買った孫の土産物に胸ふくらませているのであるうか、寝不足も苦にならぬらしく足どりも軽い。

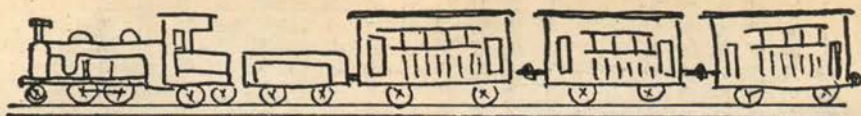
野の道や十夜戻りの小提灯
各地の十夜の好ましい方法について御教示願えれば幸甚である。

(筆者新潟県小ヶ谷照専寺住職)

諸菩薩がかげの如くつきそって、護念して安穩にして下さるとか、いろいろのすぐれた点を示されています。

このことは念仏行者は、邪惡の世界から守られ、また邪惡の社会から抜けでることができるとあります。また病気になる場合には、たしかに軽くてすむということとあります。疑いの深い人、神経質すぎる人、医者や看護人を信用しない人等は同じ病氣でも、自らの病いを重くする人です。上人もこのことを「転重輕受といひて、宿業かぎりありて、をもくうくべきやまひを、かるくうけさせ給ふ」と申されています。これも念仏の功德といえましょう。しかし、病氣になつてしまつてから、病氣を直すだけのために祈つたり、金が入用になつてから金儲けを祈つたりすることは間違ひであります。御法語の通り、これが可能なら病氣で死んだり、貧困に悩む人が一人もない筈です。他人のことはさておいて、自分独りが病氣を直し、金を儲けるようにに神仏に祈つたとしたら、これを論外でしよう。

人生の問題は別にあるのです。



念仏と道德

林 隆 碩

今日は念仏と道德について愚見を述べさして頂きま
す。じつは大分前から問題が与へられてあるのですか
ら、大に研究してお話をせねばならぬのですが、身辺
の多忙と老弱のために本意を果さず、皆様に相済まぬ
わけであります。

道德教育について、新聞面では大分ごたごたしてい
ます。文部省案、日教案、大家連の私案等それぞれの
持味があつて、私共からは去就に迷うわけです。が、
道德は無必要というものは一人もなく、これを施すに
如何に教育するかの方法論の異りであり、もし道
徳を無視否定するものあれば、それは人類を獸類化す
るものであります。これ文明の退化である。

法然上人の時代は、保元・平治・源平の諍乱であつ
て、道德の尤も退化した時代であります。特に保元、
平治の如き、皇室も、藤原も、源平も、父子、兄弟、
同族、血で血を洗つた修羅道であつた。

これを如何にして復興するか、人道の復興、これ真

に急場の問題である。これに對して二つの運動が行は
れたのである。

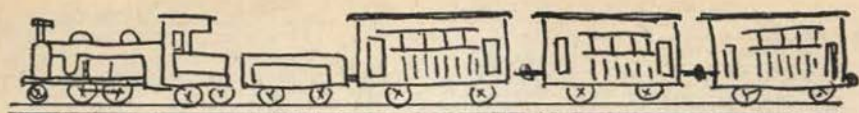
(一)は、人倫道德の衰退は仏戒の不振からである。

この仏戒の再興が即ち人倫の復活とされて、南都を
中心に説かれたのである。大悲・興正の二菩薩は其の
両将であります。

(二)は、道德の退廢は仏信の下火からであるから、すべ
からく信仰運動を盛にすべきであるとの考でありま
す。その先陣が我が祖法然上人であります。続いて栄
西・道元・親鸞・日蓮であります。

どちらも仏説に基いて説くのであるから、何れに愚
はなく相当以上の効果があつたのですが、仏戒再興の
運動は一時鎌倉まで進出して積極性を見せたのです
が、全日本的にまで拡がらずに遂に下火となりました
のです。

しかるに仏信よりの人倫の再興は全国的かつ永久性
を示したのです。わたくしは、この歴史が示めた大



教訓を忘れてならぬとおもう、歴史はくり返へすとか、現代の道德の対策について、文部省案も日教案も畢竟南都の運動をくり返へすものであつて、人倫は道德に由つての直接の対策論であるとおもう。信仰の振作が即ち道德の再建であるという運動はねつから聞かないのである、ここに現代の欠陥がありませぬか。

法然上人は念仏以外は惣てを廃捨した、念仏独立の祖師である。これを力説したものが根本選願念仏集である、此の選願集には仏戒も選捨して戒法の首は見事に切り落されてある。即ち末法無戒論であります。末法無戒論に就いて弟子達との問答物語りを一つ一つここに挙示するの煩は略します。

にもかかわらず戒法をお授けになつて居る、この点にえきらない不徹底として學者達に由つて転々と論明されてあるのは、一面から申せば無理からぬ次第であります、けれどもこれは上人を真解せざるがゆえであります。

一体、念仏には二つ価値がある、宗教的価値と道德的価値である。これがあるが故に念仏が至尊の教であるわけである。なんぼ宗教的価値は至上のものであつても、道德的価値がなかったら、人生に必要性を欠く、道德的価値は至宝としても宗教的価値がなかったら宗教として取るに足らない、選願集は専ら念仏の信仰的

価値が絶対的に力説されて、道德的価値はこれに籠るものとして不説であります。されば法然上人には戒に對して二つの態度がある。

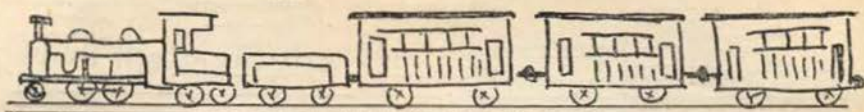
一、戒を戒としての戒は、末法無戒論である。

二、念仏の道德的価値としての戒は、末法有戒論である。

我が浄土宗に宗脉……念仏信仰……と、戒脉……念仏の道德的価値……の両脉が元祖以来脉々として連續していることは実に謂れあることと申すべきであります。

この道德的価値を梵網經に依つて、十重四十八輕戒と説くのであります、同一の菩薩戒經ではあるが天台宗にいう意味とは違ふのであります。三聚の淨戒も、十重も四十八輕も念仏者の倫理規範であるとすべきであります。

天台大師が有信即戒、信あらば即ち戒ありと仰せられました。仏教の真実の信であるならば、その信の中に自然に戒が内存しているのである。特に戒だ戒だとかましくいわずとも戒があるのが仏教という信であるとの謂であります。よし信ありとしても其人が破戒無慚であるならば、その人の信は仏教的信とは許し得ないの意であります。さすがは天台大師、言い尽して妙であります。我が祖も此の立場に立つて戒をお弘め



になったのです。

「万善妙体は名号の六字に即し、恒沙の功德は口称一行に備る」

の万徳所皈の念仏です。此の無上大善根、不可思議功德に皈命し奉った信に戒のあることは蓋し当然です。さもなければ万徳所皈とは申されぬのであります。御法語に

「十重をたもちて 十念を称へよ 四十八輕を守りて四十八願を頼むは 心にふかくこいねがう所也」これは戒を表にして信仰が裏に説かれてあるが、「十念を称へて十重をたもてよ 四十八願を頼みて四十八輕を守るは 心にふかくこいねがうところなり」

であります。

これ即ち他力信が戒となるべきを教示遊はされたのである。十重と十念、四十八輕と四十八願、これは、文章の妙から来た対句であると共に、信仰の妙からも来た対句であります。十念と四十八願は有信であり、十重と四十八輕は有戒であります。戒即ち道德である、むかしより念戒一致と申します。実にその通りで今では念仏道德一致と申さねばなりません。

合掌

座右の銘

一切の行は信を以て首と為す、もろもろの徳の根本なり

(梵網經)

自ら信じ人を教えて信ぜしむ、難きが中にうたた更に難し。大悲をつたえて普く化すれば、真に仏恩を報ずることに成る

(住生礼讚)

いさなとり海や死にする山や死にする死ぬこそ海は潮干て山は枯れすれ

(万葉集十六)

假令身を、諸の苦毒の中に止むとも、我が行は精進にして忍びて終に悔いざらむ

(仏説無量壽經)



秋の七草

村上博了

色づいたぶどうや柿が、秋北風に振れる頃ともなれば、大気は緑り色に澄みわたり清涼の気は大地を覆い果実や茸の季節となる、秋である。

よろずの果実類は自然の運行と同時に黄に赤に色づき香り高い甘い香りを発散させる、嬉しいものである。

山の幸に茸がある、秋の味覚の王座に近い、茸狩りに行くと秋の七草が昔ながらの美しきで山林を飾っている。自然美は飽きないよきがある。

(1)ききょう (2)くず (3)おみなえし (4)すき
(5)なでしこ (6)ふじばかま (7)はぎ
が七草である。

いづれも万葉集に見えるところから昔からある日本の植物である。

七草ときめたのは万葉の歌人山上憶良の歌によっている、憶良はききょうを朝顔の花、すきを尾花と呼んでいる。

七草の七の数字の意味は、正月の七草、お盆月の七夕などに出てくる七であって一見深い意味はないようである。

併し仏教では七は割り切れない数で無限数の代表とみる、従って吉数縁起のよい数とする、物を贈る場合七個とする訳合である。

正月の七草は食用となり、秋の七草は薬用になる、尚炎暑の夏に耐えて、寒気身にしみる冬を迎える前の、全力を尽した美しさの映える秋である。人生も亦壮年には働き効のあるよう青少年期に、その基礎を造り、晩年は錦を飾りたいものである。

二

ききょうは、おかとき、或はきちこうとも云われている、茎の先端に五弁の紫色又は白色の鐘状の花をつける。秋の庭や野をいどるかれんな花であって、目にしみるような、目の覚めるような美しさのある花形である。

下野の藤原一族は、このききょうを家の紋どころとしている。兼好法師が諸国遍歴の折り、野州の那須が原で行き暮れてしまった。秋の日も西に沈み夜風が軽く肌を撫でる頃、近くに灯火をみとめて一夜の宿を求めたのである。主の老婆は、心よくもてなしてくれ

る、まどろんでいると「おお痛いよう」と云う泣声に目ざめて気付くと、原の中の一木松の下に仮寝の姿であつたが、前を見るとしゃれこうべの目の間から一本のすすきが生じて風にゆられていた、さては老婆のどくろよと、ねんごろに誦経念仏したと云われる。

ききょうの根は、咳をしずめる効ありとされている。

ロ

くずはくずかず、とも云われる、豆科の蔓性の植物であつて、葉は三小葉からなる複葉で大きく、茎と共に褐色の毛が生じている。

葉の腋に約二〇センチ位の花をつけ、紫紅色の蝶形の花で珍らしい。

雑木林や松林の中に生繁って野趣紛々、いかにも大昔の感がある、つるは布を作ることにも出来るし、根は解熱剤となり葛粉ともなる、風味ゆたかな秋の味がする。

ハ

おみなえしは女郎花とあて字が用いられ、おみなめしとも云われる。

葉は羽状複葉で淡黄色の小花が、花かんざしのように多数傘形に咲き、根は干して「ずく

み」除けの特効薬と云われる。伝説にとんだ花で旧七月を女郎花月とも呼ばれ、人生に一番近いような気がする。

松林や雑木林の中になよなよと咲き誇っている姿は、丁度若い女の人が誰かを待っているような姿である、狂言音楽によく用いられる。

洛外の山野にも女郎花は多い、修行廻国の念仏旅僧があつた。洛外に出て、松かげに独り咲き誇って風にゆるくゆれている女郎花を、じっと見とれていたのである。

何時の間にやら公卿姿の頼風が、その愛人と手を取り合つて、どこからともなく僧の前立ちに現われた。ひそかに告げて、私どもは邪淫悪業の為に地獄におちて業苦をうけて解脱する所がなく、尚毎日苦しんでいます。今貴僧におあい出来て、こんな嬉しいことは有りません、これをご縁に一片の御回向をおたのみ致します。み仏の慈光によって仏果を仰ぎたい、と懇願する。僧は彼らのざんげを聞いて思わず合掌し心から念仏する。

念仏の功德宏大、直ちに仏果を感じ解脱したのである。

ニ

すすきは薄、茫と書き又は尾花とも云う、いね科に属し多年生の植物で、むらがつて生える、屋根くさとして大事なものであり、月にすすきが画かれなと秋の趣旨が充分でないほどである。日本各地で中秋の名月には五本或は十五本のすすきを柿や栗の枝と供えて、豊作を祈願する。

茎の先きに尾形の花が長くのびて、風にそよぐ姿は、各種説話のもととなっている。

幽霊を捕えて見れば枯尾花

野趣紛々、秋の王座を占める。

ホ

なでしこは撫子と書く、文字からして可愛くて可愛くて耐らないと見られる。葉は線状をして先端がとがって、緑白色である。花は淡紅色か白色でかれんである、組合せて紋としてよく用いられている。種子は利尿やむくみとりに効くとされる。

古来よりある草花で万葉にも詠まれて現在でも尚秋の庭を飾る、その容姿は女性的美しさがあり、つましやかな美しさは大和なでしことして日本女性の別名ともなっている。

いかにも秋が来たと云うことが感ぜられる草花である。

ふじばかまは藤袴ともかき菊科の植物であつて、茎の下部の葉は三つ葉となつてゐる、花は茎の先きに咲く、ぶどう畑の辺や雑木林などによく見かける、菊の先祖であらうか。多年性の植物であつて、自然にのびて秋の野辺を飾る秋の風物詩である。

萩は豆科の亜灌木であつて叢生する、葉は複葉で多数房状形の紅紫色か或は白色蝶形の花をつける、遠くからでもよく目につく、殊に小松林の中にある時は一段と美しい、種類が多く、昔から庭に移植されては観賞用となり、又家畜の飼料ともなる。

日本全国に多いと見え、長州では地名となつてゐるところもある、雑木林には殊に多い。

茸狩りに行つて、はぎを左右にかき分けて、その根元に大形の初茸を発見する、香しい花卉が鼻につき、しみじみと秋の香りを満喫する。

三

秋の七草を切りとつて、仏前に供える、けばけらしい美しさではないけれども美しいものである。

七草のあつさりした色合の調和は、尊い深みのある奥ゆかしい美しさがある。野生の七草は昔と同様な美しさであらう。

昔ながらのお盆、お彼岸も過ぎ、みのりの秋穫の頃、夜空の星の中に中秋の名月が浮ぶ時、花びんに清水を汲んで七草をさす。大昔の先祖達も同様にしたものであらう。

供える我らも亦日本人である、よき伝統は形ばかりでなしに、精神にもある筈である。七草を見る度毎に秋を感じ日本人のよさを子孫にまで伝へたいものである。そのよさは清き心であり清き土であり変らぬ節操でありたいものである。

(増上寺文化財部)

x

x

x

x

仏教ものしり帖

燈明

仏様にお燈明を上げるのは何故か。これは仏智をあらわすものである。どんなに真闇なところでも、一つの燈明があればあかるくなる。光明は暗黒を破つて光り輝く。そのように、智慧の光りはこの世の愚かしい人々のために、人生の行路を照らして下れる。闇は無智、煩惱をあらわす。すべてのものの形を見えなくする。それを照し出して、ものの本当の姿を示して下れるのが光明であり、智慧のまなこである。

仏前に、静かにまたたく一本の燈明にも、心をめぐらせば、そこには深い仏の教えがひそんでゐるのである。朝又、仏壇に手を合せる時、燈明に火を点ずると共に、自分の心にもまた、あかるい火を点じて、あやまり多い人生に道を迷わぬようにしたい。

すずめのおはか

内 山 憲 尙



して来て、今日では何十羽いるかわからない。雀の天国である。

六月中旬のある朝、早く来たこともたが「雀が死んでいるよ」と言っていた声は、部屋の中にいた先生たちに、かすかに聞えた位で、別に気にも留めなかった。

子供たちの帰った後、何気なしに「おもちゃ塚」の方を見ると「すずめのおはか」と幼稚な字で小木片に書いて、その前には牛乳の空ビンに白い花がさしてあるのが眼に入っ

て見た。放課後だったので職員室で先生たちに聞いて見た。

『おもちゃ塚の前に「雀のお墓」をつくっているが、先生たちの中で誰かが指図したのですか。』

ところが、どの先生も知らないという。どうやら年長組のこどもたち数名で相談をしてこしらえたらしい。

公孫樹の下に落ちていたというから、子雀でまだ充分飛べないので、枝から落ちたか、

「幼稚園の庭の木に、雀が巣をつくりましたよ。」と家内がいうので、それから気をつけていると、なる程夕方になると、チュウチュウとかましい鳴き声がしている。

少し大きい樫の木と、ちよっとした公孫樹があるが、これに巣をつくつたらしい、夕方になると葉の間を飛びまわっている雀の姿が見える。

三月末から改築を始めて五月に出来あがったのだが、それまでは、幼稚園の園舎の屋根の下にいたらしい。ところが、今度は二階建

になって、自分たちの巣がなくなったので、すぐ前にある公孫樹に移ったのだろう。それに、改築ができたので、今まで玄関のところに置いてあった、犬小屋を庭の方へ移した。この犬小屋には、柴系の犬が親子で住んでいる。大きくならない種類で、園児たちによくなつて、可愛がられている。

よく見ると、犬の食事のアルミ鍋に残っている飯粒を雀たちがたべているのである。

雀たちにとっては、ありがたい御馳走である。犬のいないのを見ては、おいしい食事にありつける——かくして、次第にその数を増

病気が何かの雀で、下へ落ちたのか
どちらかだろう。

×

私の園では、時々「金魚のお墓」とか、「カナリヤのお墓」などがつくられる。先生が指導することもあるが、たいていは、子供たちの自発的な考えから作られる場合が多い。こんどの雀の例も、誰も知らないうちになされている。

×

私の園では十数年来「おもちゃまつり」というのをやり、「おもちゃ塚」の前で、足や手のとれた人形、頭のとれた兎や犬の人形を家庭から一つづつ持って来させて、それを供養してやる行事を毎年十一月にやっているのである。

年に一回のささやかな行事であるが、この行事から何か大きい宗教的情操への働きかけがあるような気がするのである。

×

それから二三日した朝、年少組の子供たち



が、小さい手を合わせて、「すずめのおはか」の前にしゃがんで、一しゅうけんめいにおがんでいる姿を見て、心からうれしくなった。

×

「公孫樹の雀たちよ、どうか安心をして、果をつくっておくれ、うんと子供をふやしておくれ、仲間の雀もよんで来ておくれ。うちの幼稚園の子供たちは仏様のようにやさしい気持ちをもっている子供ばかりだから」と雀に言ってやりたい気になった。

×

夏休みになって子供が来なくなった園庭に朝夕雀たちの声がにぎやかに聞えている。園児に代って、たのしく歌ってくれている。

(三三、八、二二)

(聖美幼稚園長
東京高等保育学校長)

会員各位にお願い

- 1 会員五名以上で支部をご結成下さい。
- 2 支部には、支部拡張用としてお申し込み次第無料で見本「浄土」をお送りします。
- 3 二十名以上の支部には、毎月浄土を一冊贈呈します。

大島徹水上人の

思い出



法隆寺や正倉院の外に、世界一と名のつくものがないわが国で、芝公園のテレビ塔が世界一の高さになるというのは愉快である。東京の人たちは、日ごとのびてゆく塔を眺めて楽しそうである。こうなると海からの表玄関たる芝浦から、まっすぐ芝公園まで、新名所にするのだと様々な企劃があるらしい。

芝増上寺がこんなことから急に大増しされることとなったが、実は大島上人が増上寺法

主でおられた時分に、同寺を中心に東京の新名所たらしめる構想と企劃があり、活潑に動いたものである。しかしその内に戦争のために増上寺が軍事的に利用されたり、御霊屋が焼けたり、その計画は自然消滅となった。鉄塔のおかげで、芝公園が脚光を浴びることになったが、それとは逆に増上寺のおもかげが曾ってなかった位に薄れ、しよんぼり見えることになってしまった。

大島上人が増上寺に御晋山になるについてはいろいろ複雑な経緯があった。それは別として、昭和九年一月二十九日に道重僧教上人

が御遷化になり、その後に岩井智海上人が御晋山になったが、間もなく山下現有管長が御遷化になったので、岩井法主は知恩院に出られた。その後に大島上人が十二月十五日に御晋山式を挙げられた。つまり同じ年に二回も晋山式が行われたわけである。

そして晋山式では、上人の堂々たる偉容に人々は敬服してしまった。これは上人にとって恐らく御一生に一度の晴れ姿であった。式が終って、芝青年会館で晋山披露の大会が開かれた。この時の上人の御礼の言葉の中に、「私の母はいつも（家康公を）権現様といっておられたことを子供心に今も覚えております」の一句があった。何んでもない言葉であるけれど、この言葉の中には容易ならざる上人のお氣持が含まれていた。

上人は、幼名を源次郎と申され、父は大島市郎兵衛、母は糸い、明治四年三月十五日に愛知県知多郡大府町の一農家の四男として、呱呱の声をあげられた。やがて上人が九才になられた時に、碧南市貞照院戒幢和上のお弟子となって剃髪された。

九才の上人はお伯母さんに当る蔡華庵立に

ともなわれて貞照院にゆくべく家を出た。母親のゐさんは畑から急いで帰ってきて、上人を送って一諸に家を出た。ところが貞照院まで着かない内に、ゐさんはフト立どまり、しげしげ上人の顔を眺めてから「お前はきつと偉いお坊さんになりなさい。それまでは母を訪ねて帰ってきてはいけません」と申し渡すと、ゐさんはクルリ向きを変えて家に帰ってしまった。上人は頼みとするお母さんが、突然途中から帰ってゆく後姿を見送りながら、今更のように決心を新たにされた。

事実、上人はその時以来一度も母の所には帰らなかった。

上人は遂に母を訪ねては行かなかったが、母のおもかげ、特に最後の教訓は上人の念頭から去ることがなかった。晴れの晋山式の挨拶に母のことが「今も覚えております」と自然に述べられたのも、そのためであった。

昭和十八年四月十二日、増上寺は明日からの御忌の準備に忙殺されていた。だから、この日上人が一日留居されていたのを、誰も深くは注意しなかった。ところが前日おそく、上人の手許に「ハハシス」の飛電が届いてい

たのであった。上人は計報を誰にも告げず、一番の列車で独り故郷大府町に馳けつけて行った。

何しろ、母と分れて六十五年が経っている。町の様子もがらり変って、畑が今では家が建ち、生家を訪ねあてては一苦勞であつた。

○

貞照院は律院であつた。上人の師僧の戒幢和上の先代を至道天然和上といった。この人は、夏の夜中に裸になって庭にでて、しばらくの間、蚊に血を施していたという位の人であつた。こうした律院で

育てられた上人が、律僧となるのも当然である。しかし上人が十才の折に、他寺から「私の弟子にと」懇望されたが、「妻君のあるお寺は、私は嫌だ」といって修行の辛い貞照院を去らなかつた。これをもて上人の律僧ぶりは、時代や環境

だけではないことがわかる。

上人は名古屋愛知支校から東京高等学院に進み、京都浄土宗専門学院を卒業した。明治三十七年四月に浄土宗第五教校（東山高校の前身）の教諭兼幹事に就任された。そして明治四十四年九月に成等庵に入られた。

成等庵はもと浄土律院として名のあつた寺であるが、久しく無住で荒廃しきつていた。

何しろ一時は、俗人の住居となつた位で、無檀の寺であつた。電灯はなし、雨はもり、壁は落ち、畳は破れ、縁はぬけるという、怪談に出てくるような荒れ寺であつた。上人は毎



日毎夜寄付勸募に歩かれた。何しろ食べ物を
みても、煮物に椎茸や昆布を使うことがあつ
ても、朝から晩まで三河の味噌汁ばかりであ
つたという。だから食費は月に三円あれば足
りたというので、いくら物価の安い当時とは
いえ、苦しい日常の暮しぶりが知られる。従
つて、上人が第五教校を辞めてまで、成等庵
に入ったのは、なんとか再興したいという強
固な信念と決心の下になされたのである。

もつとも阪根翁の懇請によつて、大正元年
五月には家政女学校に入っているので、成等
庵の再興は中絶されたが、決して上人の念頭
から消えたわけではなかつた。例えば昭和十七
年のこと、上人はある人に、「もう成等庵の
仕事をやらねばならない。あればかりは一日
も忘れたことはない」と申されたことでもわ
かる。

上人は成等庵のほかに、泉谷の西寿寺の再
興にも努力された。また金勝の阿弥陀寺と安
土の淨厳院に住職された。西寿寺は無檀で、
明治七年に廢寺となつたのを、阪根翁が堂宇
敷地を買いとつて、明治十一年に知恩院に寄

附したもので、この上ない貧寺であつた。そ
の当時の西寿寺は、「終日来る者もなく、法
要もなし、食べものもなく、着るものもな
い」というわけで、朝は暗い内から遠く村々
を托鉢し、晩は日が暮れてから寺に帰るとい
うのが日常であつた。後年何かの話の時に、
上人は「托鉢はよい、第一僧侶としてふさわ
しい、謙虚な気持を養つてくれる」と申され
たが、上人は当時の暮しを思い浮べられたと
同時に、尊大な僧侶のあることを嘆かれたお
言葉でもあつた。

また阿弥陀寺は、由緒深い寺でこそあれ、
本堂の天井もまだ張れず、道具類などもな
く、すべてが不都合であり、要するにこれま
た貧寺であつた。

上人はあるとき、「私の行く寺は、なぜ貧
乏寺ばかりだろうか」と申されたことがあつ
た。そして「誰れも持つものがなく困ってい
た寺ばかりで、良い寺は渡してくれるわけが
ない」とも申されたけれど、上人は貧寺の再
興に一つの情熱を持っておられた。

増上寺においてになつてからのこと、お弟

子のM君が某寺に入ろうか入るまいかと迷つ
ていた。檀家の少ない田舎の貧寺のせいであ
つた。このことを上人が聞き込んで、早速M
君を呼んで叱つたものである。

「君は貧しい寺だからといってちゆう躇し
ているそうだが、大変な間違いである。君な
らば誰よりも寺の再興を立派に成しとげるで
あらう。一つの寺を再興することは難しいこ
とであるけれど、祖恩に報ゆる途であり、宗
門のためであり、檀信徒のためであり、君自
身のためである。」

といわれ、更に言葉をついて、

「わしの苦勞は、そんなものでなかつたよ」と
諭された。M君は上人のこの言葉を朝に晩
に服膺して、それから二十年近い今日、果し
て立派に再興することができた。

上人と家政女学校との関係は、記憶に新し
いし、誰も知るところである。簡単に列記す
るなら、家政女学校は、明治三十七年四月に
因幡葉師の庫裡で授業を開始し、三十八年五
月に華頂滋賀講舎で開校式をあげた。しかし
生徒の増加にともない万事が不自由となり、

校舎の改築の問題がおこり、幹部の辞職等があつて、明治四十四年頃早くも危機に見舞われた。この頃に上人は、迎えられて家政女学校に入られたのである。上人は学校再興の途に苦心されたが、遂に大正二年正月十二日の会議で、家政女学校は同年三月を以て閉校し、当時新設されたばかりの華頂女学校と合併することに決定されてしまった。

閉校と決定したものの、関係者は何とか維持存続の方法はないものとか苦慮し、六分の寄付四分の借金ということで、金一万円を調達する計画をたてた。教職員は俸給の十分の一を献金し、時には二銭のうどんを食べながら、東奔西走して勸募に当った。上人はこの時、三千円を調達することを引き受けられたので、その苦勞も人一倍大きかった。

丁度その頃、教鞭をとったことのある久邇宮妃静子殿下から御下賜品があつたりして、関係者は一層ふるいたち、二月十一日の会議で廃校決議を撤回することができた。

やがて家政女学校は大雲院に移転し、更に現在のところ、日新紡績会社跡に移転し、今

日の隆盛をみる基礎をつくった。

上人はある時、「家政女学校は一本一草も私の血の流れていないものはない」ともらされたが、不言実行の努力型の上人の言葉として、まさに文字通りお受けすべき一言である。

昭和十七年の秋のこと、上人はお客と対談されていた。上人のお居間には、いつも菓子折や果物が積れていたが、その時上人は、葡萄を一粒一粒口に入れないが、愉快そうに話をされていた。無意識のように葡萄のふさに手をのばされて一粒むしられたが、はずみで他の一粒がころころ転がり、たん壺の中に落ちてしまった、すると上人は平気でそれを拾いあげ、口の中にほうり込んでしまった。

その時のお客だったT師が後で、「たん壺から葡萄をつまみ上げて喰べる姿が自然であつただけ、上人は非凡な方である」と感心していた。しかしこれは上人の人柄というより、永い間に身についたものの現れだった。また一粒の葡萄まで贈った人の好意を無駄にしないお気持から自づとそうなったことであらう。

(吉野翠幹)

(続)

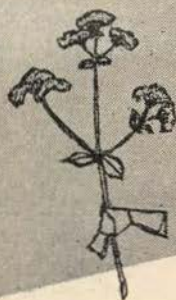
仏教ものしり帖

問 仏様にお参りするとき、お線香は何本あげたらよろしいのでしょうか。

うか。

答 一本あげる人も、二本あげる人も、三本あげる人もありまして、

それぞれ理由があります。一本は一心、まごころを表わします。二本あげるのは、一本を仏様のために、一本を自分のためにあげて、仏様と自分の心を清めるのです。三本あげるのは、一本目は仏に供養し、二本目は法のために、三本目は僧のために供養します。つまり仏・法・僧の三宝に供養するのです。いろいろありますが、真心こめて一本を真直ぐあげるのが一番よいでしょう。林のように無暗に沢山立てるのは煙くいてけません。



童話

秋草の歌

森 正義

九・かとうきんいち

「ねえ、正夫ちゃん。知っている」

「何を」

「どうようの たかお おじさんが入院したのよ。」

「えっ、たかおおじさんが？ どこが悪いの」

正夫の心臓は、どきっどきっとはげしくなりだした。

「赤痢なのよ。アミーバー赤痢だって。うち、すっかり消毒されて白い自動車です立病院につれてゆかれたのよ。」

「いつ」

「もう二週間にもなるかしら。おばさん、とても大変なのよ、小さな赤ちゃんがあるでしょう。あたしお守りして上げてやるのよ。」

「お見舞に行こうや。」

「いつ」

「これからさ」

気の早い吉一は、すぐお見舞に行こうと云い出した。正夫は、あの元気のいいたかおおじさんが赤痢で入院だなんて、まるで夢のようない感じがしてならなかった。色の白いよくふとった丸い顔の目ものやさしい黒々とした

美しい口ひげをつけた笑うと赤ちゃんのようにかわいい、たかおおじさんが病氣だなんて、どうしても思えなかった。

たかおおじさんと云うのは、ゆり子の近所に住んでいて、いつも、どうようを大きな声でうたっている、おじさんだった。詩人だというのに、いつも朝早く起きて大きなべんとう箱を二つぶらさげて、会社へ出かけて行くのだった。二日おきに夕方から出かけてゆくのだ。器用な人でお休みの日には、ガチャガチャとミシンを踏んで洋服なんかを、ぬっている時もあった。

正夫たちを見かけると

「みんなに、いい歌を覚えてあげようか」と、云いながら、ミシンの台をたたいて調子を取りながら、美しい歌を覚えてくれた。きょう三人が放送局で歌って来た、「こおろぎ」の歌も、この、たかおおじさんから習ったのであった。

その、やさしい、どうようのおじさんが入院しているということは、三人にとっては、たしかに重大ニュースだったのである。

「ゆりちゃん、でんせん病院、面会出来る

の？」

「ええ、できるわ。わたし、この間、おかあさんといっしょに、面会室であつて来たわ。わりあい元気だったわ」

「そんなら、すぐ行こう」

三人は、それぞれ、いろんな事を思いながら、桃山の坂を降りてゆく。陽もいつしか暮れて宵闇が、だんだんあたりをつつみはじめた。

「たかおおじさん、アメチョコ好きだから買ってゆこうや」

と、吉一が云うと、ゆり子が

「おじさん、まだ食べ物、だめよ」

「そんなら、本にしようか」

「あつ、あそこに花屋さんがある。おじさん詩人だから、きっと花好きだろう」

三人そろって、小さな花屋の店に入つて行った。夕方なので奥の方で、お魚でも焼いているらしく、こうばしい、においがして来て、店には人影がない。

正夫は、おじさんが歌う、童謡に出てくる花を一本一本より出した。

「なるべく、つぼみの方がいいよ。おじさ

ん長くたのしめるからねー」

菊、えぞ菊、みやこむすれ、ききよう。おみなえし、

花屋の店さきは、すっかり秋の野だ。

ゆり子が、ピンクのカーネーションと赤いガーベラとをそえた。奥から出て来た、あいの良いおばさんが、セロファン紙でつつんでくれるのを手にすると、急いで病院の玄関へと走った。

一度、来た事のある、ゆり子が、ずんずん先に立つてゆく。ボーチの植込みには、白い萩が、夕闇の中で真珠のように光っていた。

受付へゆくと、もう五六人の人達がいて、何か声高かに話していた。

「どうしても、あわせていただけませんか。」

「ええ、お宅だけと、いうわけには行きませんからねー」

「ほーら。ちゃんと、ここに書いてあるでしょう。面会時間は、午前九時から午後四時までとね。」

「でも、ずい分速くから来たんだから、ぜひあわせて下さいな。」

正夫は、この問答を聞くと

「とても、だめだな。」
と、思ったが、

「おじさん、南館三階の木村たかおおじさんに面会させて下さい。」

と、頼みこんだ。おじさんは、老眼鏡を鼻までずらしてバラバラと、部あつて患者名簿をくついていたが、

「病名は」

と、聞いた。

「赤痢です。アミーバー赤痢だそうです。」
「ああ、これだな。せつかくですが、面会は出来ませんよ。」

「ねー。おじさん、あわせてくださいな。」
と、ゆり子が云った。

「だめですなー」

「でも、この間は、あえてよ。」

「この間は時間が早かったからですよ。ほーら。ここに書いてあるでしょ。面会時間は、午前九時より午後四時までとね。もう八時ですからな。」

「でも、たかおおじさんは、もうなおっているんですよ。だからあわせて下さいな。」

「よくなくなっていられるなら退院も、もうすぐですよ。その時に、ゆっくりお逢いなさい。」

「チエツ、なんだい。僕が受付だったなら、だれにでも、すぐに逢わせて上げるのにな。おじさんのしみったれ」

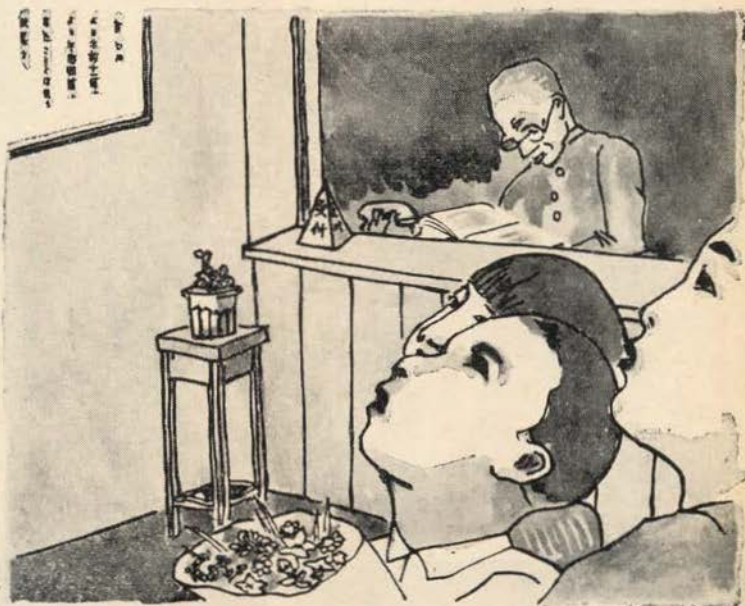
と、吉一が、かんしゃくを立てて、大きな声を出すと、

「おじさんも、つらいんですよ。ことわるのがねー。」

はげちよろけた、黒のつめえりの服を着た白髪のまざった、やせた受付のおじさんが云った。正夫は、このおじさん達も、ほんとは心のやさしい、あたたかい人だと思われて来た。お仕事だから、ことわっているのだ。あわした為に病気が一層重くなって退院がおくれる人もあるだろう。

この前の扉を開くと、中は死の道へ続いていて、このおじさん達は、門番の赤鬼青鬼かな。こんな事を考えていると、ぞーっとするような不安な気持ちにおそわれるのであった。

「でわ、この用紙に用件を書いて下さい。なるべく病人さんが読んで笑い出すような面



白い文句が、いいですよ。

受付のおじさんは、鬼ではなかった。

みほとけ様のおそばに、いらっしゃる、観

ゆり子も、吉一も、それぞれ名文句を考え

て書きこんだ。吉一は、赤いカーネーション

音様な。勢至さまか

な。正夫は、たかおおじさんに、おじょうどのおはなしを聞いた時の事を思い出していた。

正夫は、用紙にこう書いた。

「大好きなおじさん。

おみまいに来ました。あ

えないで残念です。元氣

を出して一日も早く、退

院して、お歌を教えて下

さい。おすきなアメチョコ

も買って来ようと思いま

しましたが、食べられなか

ったらいけないと思つて

お花を買って来ました。

お花はお部屋一ぱい秋の

色をそめてくれる事でし

よう。お大事に

正夫より

大 陽 曆

親族の佐藤南浦は亡父鏡林の門人で、維新後大阪に居て時々通信もした。明治五年、私が十一才の時、初めて郵便というもので、手紙が届いた。時は九月頃と思う。義父がそれを読むのを聞くと、飛び立つほど嬉しい事がかいてある。大要は

「従来用い來り候大陰曆廢止に相成、西洋各国に行われ候大陽曆に改正せられ候趣にて、当年は十一月三日が来年一月一日に相成、従年の正月元旦同様新年を祝する事に相成、当大阪にては已に正月の準備致し居り候、御地方に其内右御達しに相成候事と奉存候云々」

と云うのである。子供心に正月を待ち兼ねてまだ正月まで四月もあると思つて居たのが、十一月三日が元旦ぢや、何という嬉しい事であろう。私はこれを聞くと直ぐ家を飛び出して遊びづれに触れ廻った。それは嘘ぢやというものもあり、又喜んで内へ知らず者もあり、子供仲間では大騒ぎであつた。私も其時の嬉しかったのは、恋女房と結婚した時よりもっと嬉しかった。

(M記)

へ、ゆり子は、おみなえしの花に、正夫はききょうの花に、手紙をくくりつけた。

「おじさん、しおれるといけないからお花、早く渡して下さいね。」

「はいはい、しようしました。」

三人の子供達が、面会をあきらめた事を知ると、おじさん達は、急にやさしく笑いながら、三人の頭を、かわるがわる、なでてくれた。

「木村おじさんは、三人のお手紙を読んで、きつと元気になるよ。あうより以上に、木村さんは、あんた達のお手紙でなぐさめられるだろう。」

「おもしろい事を書いて上げたかね」

と、初め、おそろしい顔をしていた受付のおじさんが云った。にぶい電燈の光の下で落ちくぼんだ目が妙に氣になる顔だった。吉一は、おもしろい事を書いたと見えて頭をかきながら、くすりと笑った。

「おじさんおねがいします。」

と、三人は、ベコンと頭をさげると外へ出た。

病院の、どの窓の光も不安と心配の色をた

だよわせてうるんで見えた。

「南館三階というと、あの辺だよ。大きな声で呼んで見ようか。いちにのさん、たか おお じ さーん。」

三人の声は、お城のような白壁にぶつかつて

「たかお お じ さーん」

と、はねかえつて来た。

しかしなつかしいたかおおじさんの、ずんぐりした頭は、どの窓からもあらわれなかつた。

「リリリリン ロロロロ キリキリ」
こおろぎがないて、病院の白い建物は静かにしづかに眠っていた。

(おわり)



現代妙好人伝

三浦ミユキ夫人の信仰



中川大仙

一

ミユキさんは熊本県の出身で家族と共に平壤に住むことになった。十八歳の時平壤の道立病院の看護婦となって勤務することになった。早く仏縁に恵まれやさしい心の持主であった。同僚の親しみもよく、仕事も敏捷に親切に立廻ったので患者達から慕はれていた。

同県人で親同志の親交ある車夫に三浦某があった。その長男T氏は家庭の事情で中学校もやられぬので、裁判所の給仕となって働いていた。ミユキさんはT氏に将来の希望をきいて見た。その時T氏は自分はどんな苦学しても弁護士になりたいと答えた。ミユキさんは

双方親達の諒解を得て、T氏を勧めて東京へ

遊学に送った。当時東京では一カ月金六円あれば勉強ができた。ミユキさんは一カ月の給料は金三円である。余暇を利用して裁縫もした。夜宿直には休む人の分も勤めなどして金六円づつ送ることをかさなかつた。この熱意ある援助を得て、中学課程から始め弁護士となる資格を得るまで多年真剣研究し、見事に実を終ぶに至り、弁護士試験にも合格して平壤に於て弁護士事務所を開設する事になった。

二

T氏はミユキさんの涙くましい援助によって今日の位置を得たから、両親の諒解を得て、媒酌人を立て、ミユキさんに結婚を申込んだ。

三

T氏の父は老の身に重労働はできなくなり家業を止め、主人一人の収入で、社交多忙な

だ。ミユキさんは、私はそういう下心がなくてお世話したのはありません。只々世の中に立派に活動できる人になって欲しいといつも心に願ひ、神仏にも祈って居りました。幸に神仏の加護あらせられ、私も何の障りも無く援助を続けられ、Tさんも健康で真剣に研究なさつてめでたく目的を果されたので、心から祝福して居ります。これ以上の満足はありません。お思召はありがたいけれども結婚は御辞退申上ますときっぱり断られました。T氏から再参勤められてもきき入れてくれませぬ。そこで母上が目から出かけてミユキさんに懇願した。T氏は一生独身を通してミユキさんの他の人とは結婚しないと申して居ります。どうか今日まで助けて頂いたと同様、T氏の面倒を見てやって下さいと頼みました。慈母の涙ながらのお言葉を受け、断わりきれず、遂に承知して、ここにミユキさんはT氏の夫人として世に立たれるようになりました。

一家の財政は骨が折れたようです。一男二女

をあげましたがその中、弁護士界の花型と世に慕われるようになり、社交上夫人の勤めも多忙になりました。T氏は華頂寺総代の一人であり、夫人も同寺明照婦人会の幹部として協力せられた。華頂寺は昭和七年春本堂再建を起工し、同八年六月完成した。故神林周道上人鮮満視察の後、華頂寺本堂は鮮満第一なりと報告せられた。この本堂落慶記念五重を啓建し伝灯師熊野宗純上人を御願いした。この時ミユキ夫人は私に特に頼まれた事は、主人はよく人の世話もするし、お寺の事もよく尽くしてくれるのですけれども、内では御仏壇に手を合せて拝ませぬ。私は話をする事もありませんがとり合ってくれませぬ。そこで今回の五重にはどうしても勧めて入れて下さいという事であった。

五重に関する総代会議の時、第一に今回の五重は総代を中心とする事、それには七人の総代全部御夫婦共発起となって頂く事、座席の第一列発起十四人と定める事にします。幸に之が用いられ、受者も予定以上にでき一週間の間無魔障五重終了いたしました。

四

一回も欠かさず聴聞、礼拝、念仏精進せられたT氏は実に堅固な信仰を得られ、仏壇を求め、三尊、両祖大師の御木像を京都より奉迎し、経机及仏具を整え、三人の子供と共に読経したいから夜御経を教えに来て下さいと頼まれ毎日通いました。浄土勤行式、礼讃、阿弥陀経と一緒に読んでゆかれるように協力しました。家族一同で毎日この礼拝が行われるようになりました。全くミユキ夫人の信仰の感化を深く感じます。

次でお寺の法要毎、百人以上数百人來詣ある時共に読経を發願され經文五百部本堂に備付、春御忌五日間、彼岸七日間、お盆三日間秋彼岸七日間、十夜五日間、この法要參詣人皆で読経いたします。遂に參詣人二百余人共に礼讃行道もできるようになって平壤各宗のある中浄土宗の信者の法悦を物語るものでありました。之は本堂落慶記念五重法悦の延長であり十四人發起者であった総代各々の協力の賜であり、ミユキ夫人の推進力を拝まずには居られぬ次第であります。

五

T氏はお正月を家族づれ故郷熊本に販えり別府に休養することを例としておられた。昭和十三年は久しぶりで平壤で正月を迎えられた。元日夕方T氏から電話で、内の風呂が故障でだめだからお宅の風呂をお尋ねするとの事であった。幸に風呂をわかしていたので早速お出下さいと申した。T氏は三人の子供をつれて来てゆっくり風呂をすまされた。丁度会津から送って来たこうじで甘酒をこしらえていましたので、それを上って頂いてお販えりになると。ミユキ夫人はいつも嬉れしような表情で入ってこられた。すぐ本堂へお参りになりました。夕方と申しても大分遅くなっているのです。それに本堂のお参りが長い。そっと入って見ると心ゆくばかりお念仏をして居られる。涙ぐんで居られるようにさえお見受けした。かくて本堂からお下りになりお風呂をお召しになって、ゆっくり落付いて、甘酒を頂きながら、話は次から次とつきませぬ。平壤でお正月をしてよかった。ゆっくりにおまいりができて嬉しかったですよ。と大変喜ばれ十一時も過ぎましたので、お送り

して先方の門前でお別れしてきました。

六

社交界にもいつも正月留守してをられたが、今年は久しぶりで平壤で正月する事にな

仏教ものしり帖

◎ 普賢（ふげん）またの名を遍吉（へんきつ）といい、文殊菩薩と共に、釈尊の脇士として、智慧と慈悲との二徳をあらわしている。即ち、文殊が如来の左方に侍して、一切諸仏の智徳、証徳を司るに對して、普賢は右方に侍して理徳、定徳、行徳を司どりこの二脇士は一切菩薩の首となつて、常に如来の化導摂益を助成し、宣揚している。華嚴經に説く普賢の十六願は、一切菩薩の行願を代表するものである。形造は一般に白象に乗る端麗な姿であるが、真言密經では蓮華の坐像である。普賢はまた、古来、衆生の生命を延ばす功德があるとして、普賢延命菩薩または単に延命菩薩などとも呼ばれる。巳年の人の守護仏といわれる。

り、愛国婦人会の幹部でもあり、主人同伴で公式な賀宴にも出席せねばなりません。そこで、主人は紋服袴、ミユキ夫人は日本髪丸髷白袴紋付の礼装で公式の方は六日までに終りましたので、七日は友人関係少数ある友人宅で新年会の賀宴が開かれ礼装のT氏ミユキ夫人も出席せられた。かねて親しい間柄ですから、お互に語り合いました。その中お酒にのみますと歌も出れば踊りもはづむ。かくし芸などで愉快な新年の会合であった。ミユキ夫人も愉快な方であるが酒は口にしない方で、快活な笑いの中にも慎みを失わない方であった。宴会も終りに近づき、御飯を頂く事になった。ミユキ夫人は持っていた茶碗を落すように手から離れるようになるので隣にいる方がどうかなさったのかと声をかけたが、もうわからない様子。静におねかせて医師をよびました。

今まで元気に快活に声高々と語り続けた方が一瞬にして昏睡状態に入られた。医師はきました。が之は脳出血でありますという診断で、種々手当をなさいましたけれども遂に覚めず、八日未明に往生なさいました。

七日主人と共に礼装で三人の子供に送られ新年の賀宴に行かれる嬉しい姿は子供ながら喜ばしい印象であった。そのお母様を次の八日未明には、二つの眼閉ち、一つの呼吸絶え声なき姿となつてお迎えせねばならぬ。悲痛の極め共申上ようもあります。昭和十三年一月八日

「寿照院浄誓妙澄大師」

四十八歳であった。

悲しい中にも三人の子供は、お父さんと一緒に勤行式、礼讃、阿弥陀經、を読みお念仏して居られました。

人間総経営業務 不覺年命日夜去
如燈風中滅難服 忙忙六道無定趣
未得解脫出苦海 云何安然不驚懼
各聞強建有力時 自策自勵求常住
この聖語を身を以て教えて居られるようです。

（本山布教師）

× × ×

浄土歌壇

岩野喬久代選



天

東京 水町 國子

頂きに見れば函館鑓型にその尖端に船おほく寄る

評 高い所から俯瞰した大きな景色は歌いにくくむづかしいものですが、これはよく纏んで詠んでいます。函館市街はドアの鍵型に中が細くあとさきがひらいています。その先の方は漁港なので、沢山の小舟漁船が集っている光景を確かな眼で捉えています。

地

東京 兼藤 紀子

月日流れ娘盛りとなれる君訝しと見ぬ訪へる我をば

評 長い年月無沙汰した家を訪ねたら、小さな子供であった人が娘盛りに成長して、昔親しんだ自分を見忘れたのか不審そうに見ていると云う歌。やさしくな

つかしい誰にでも思いあたる歌です。

人

大阪 中谷 善次

二三本胡瓜を噛みて夕餉足るさてゆふぐれの長きこのごろ

評 質朴簡素な夕餉もすみまし、空はまだ明るい、さあこの長いゆうぐれを何をしまししょう。作者は都会人ではなさそうです。物うく寂しい夏のゆうぐれをふかく味わっているようです。

神奈川 真下喜太郎

輪袈裟かけ覆面をして歴史噛み写経をすればわが汗を知らず

香もなくて白さもすこし色うすく静かに佯びし山法師花

北海道 土井多紀子

孟蘭盆や追慕の涙するひまもあらぬはげしき生活にある

神奈川 金子 フミ
生きてあるしるしの如し感情の花もちりぬ凡愚の寄れば

富山 関 理一
鉄骨と働く人の影小さくおちくる庭のあちさるの花

東京 牧尾多希子
洗濯機にナイロンドレス吸はれゆくすこし無惨とおもふ感覚

福岡 吉末 真竜
大楠の古葉のいたく散る朝に玉禪して雲水の掃く庭掃きて苔むす岩に腰おろし独りわが愛つ朝の牡丹を

宮城 湯浅あい子
人住まぬ虚空蔵堂百舌のみが説法すると近きて聞く

神奈川 松原 昌治
鎌倉を黒く覆へる雨雲に露座のみ仏浴みますらし

島根 渡辺いと子
世界一働き者になりたしと風の中にて我れの思へる

東京 二宮 綾子
美しき草の一片に及ばねど人は死を知りみ仏を知る

石川 神徳 凱一
いとし子の病の重きことを知り額ふせて泣く山の病室

熊本 宮元 尚
指させる水平線に雲のごと硫黄島見ゆ鳥通はずや

東京 紫藤よね子
厨よりひくき下駄かけ病人の氷買はむと乾く道行く

福島 朝日 蝶子
遠つ祖興したまひし青根の湯五百年湧きて尽くることなし

静岡 洗醜 隠人
十年の争論つひに和議なりて宗の内外光りただよふ雨ふりて地のかたまると同信の人々ともに喜びあへり

山形 佐藤 諦敬
緑濃くしたたるやうな葉蔭より一きは高く蟬の音きこゆ

島根 吉田 弘道
神まつる薬にもまさり妙にきく春の湖畔のもも鳥の声

神奈川 熊坂 満
新緑の光みなざる斎の座に給仕の僧のいだすてのひら

鹿児島 鹿兒島 長崎 恒子
濃みどりの島影うつし朝なぎの海一枚の硝子のごとし

東京 久地楽真絲
雨の音やめばたちまち鳴きいづる蟬も短き命なるべし

偶然は必然であつた



村 田 健 治

釈尊入滅後正像の二た時は既に過ぎ去り、今は末法の世となっている。末法ということは末世と解するものですが、末世といえ、世の中は混沌として乱れ、騒ぎ落つきなく、所謂五濁惡邪の世である。こう解すべきではないでしょうか、實際今日の世相は、その通りである。

今後五百年千年と歲月がたれば、この地上の様相はどんなに変わるでしょうか、考えて見るだけでも身の毛がよだつ思いがする。謡曲の中に高砂という曲目がある、その中に「四海波静かにて国も治まる時津風枝をならさぬ御代なれや」と、こうしたのんびり朗らかな悠長時代が、いったいこの

世にあつたものでしょうか、一種の理想でしょうか、又空想の物語りを書いたものでしょうか、今日急速な進歩でどんどん進んで行けば、この地上の人間はどうなるでしょうか、私共のような年配の者は心配になつて仕方がないです。世界中に近い国々が互に平和を強く主張しながら共存共栄すれば良いが、所が自分の方さえよければ相手はどうでもよい、むしろ人類を破滅に導くことを研究しているというのではないのでしょうか。

世は「オートメイション」時代とか、宇宙時代とか、物凄いほどの変りかたで、科学の進歩も素晴らしいものであり、人間の創

造力というものは実に驚くばかりで、この勢いで進めばこの世はどうなるでしょう。しかしいかに人間がどれだけえらくなつたからとて、大自然の前には一毫の価値もない。眼の前に見聞しつつある天変地異でさえ、どうすることもできない。地上の人間を全滅し生物を灰燼にする爆弾を作り月世界旅行を企図しても、台風の進路を変えることさえ人間の手には負えない。況んや生死の問題おやです。久遠劫来、未來永劫に亘り、われわれ凡愚の覗くことができないのです。それが仏の大慈悲に包容せられ、悟りの道えの方角を教えて下さるのが釈尊である、こうしたことを考え胸に手をあてて見ると、凡愚の自分の正体を見せて頂く、向うばかり見ていた眼が自然と自分の方に向いてくる。初めて反省ができる。人間も反省ができたら凡ての問題は解決する。世の中は平和が漂う、社会は明るくなる、これが仏の教えである、所謂宗教精神である。

徳富蘇峰氏曰く、日本歴史より仏教を除けば「鰻のかば焼」より油を取ったものと同じである。

加藤咄堂氏曰く、「人間は骨と皮である
即ち仏教は血と肉の働きをする」

なんと味いのあるお言葉でしょう、今日の世相は、混亂・險惡・錯綜、闘争です、つまりこの宗教精神がないからではないでしょうか、油のきれた羽車のようなものですか、田沼・融和・話合・握手・礼讓・等等皆この精神の現われではないでしょうか。

釈尊は「人生は苦である」と説かれた、龍樹菩薩は更に「生死の苦海辺りなし」と釘をさされた。然るに新興宗教のある派には「人生は花園」と樂觀され、又ある派には「人生は陽気暮しである」と断ぜられた。誠に結構なありがたいお説である、私はどうも信ずることができぬのが甚だ残念です。どうも今日の情勢が続けらるれば、だんだんと生活は苦しくなり、人情も薄俗となり、闘争につぐに闘争闘争と、世の中は闇黒になるかのように思われて、私共の如き年寄は、さつさとこの悪婆に我慢がつけなくなつたのです。

折も折昨年二月初めの頃、定時制高校生を対象とし「青年の主張」と言う演題の下に全国コンクールが行われ、其の選入者の

御意見を放送によって拝聴したのです。

尚感激したのは、後日入賞者の一人田中咲子さんから、次のような言葉のはがきをもらつたのです。

「あの大会におきまして栄ある賞がいただけましたのも、私だけの力でなく、家庭の、職場の、学校の、いや社会全体の皆様のおかげだと信じ喜んでいきます。ともすれば現実を飛躍した世界ばかりを夢みるのが私達青年の共通点なのですが、しかし現実を超越した世界は現実の過程をふまなければやってこないのです。ですから私は今現実という道を歩いています故にあの様な主張も生れたのだと思っています」

家庭において年寄りをいたわるとか、親に孝行するとか、勤め先の目上の人に頭を下げるとか、言うようなことは封建的だとか、旧志操とか叫ばれる今日の世の中に、堂々と之を説く所、其の自信の程が覗われる。審査員又之を採択せらる。「真実は未通る、真実は人を動かす」と全くそうなのです。私はラジオの前で拍手喝采「ああ日本健在哉」と叫ばざるを得ませんでした。

さて之からが本問題に入るのであります。私が「偶然は必然であつた」と言う題目のもとに筆を執らんとするのは之からなのです。

これも去年、昭和三十二年八月初めの頃でした。早朝のラジオ放送、ニュースに次での人生読本で、東京大学教授小野清一郎先生のお話が親鸞聖人の歎異抄でした。それに続いて大正大学教授竹中信常先生の法然上人の御一生についての話でした。私は毎朝この放送を聞いて一方ならぬ感激を覚え、何というありがたいことでしょう、と深い印象を与えられたことです。

今こそ近代文明の發達、物凄いばかりの科学の進歩で、世の中は大きな転換、見るもの聞くもの私共のような時代おくれの者には頭からききとれぬ学者方のお話して、天から世界が異なるように考えていた矢先、こうした大学の先生から御法のお話しという、尊いありがたいご放送、ほんとうに嬉しありがたし勿体なさで胸が一杯になりました。昔ながらの姿が決して消えもせぬ、失世もせぬ、厳然として民族の各々に脉打っていると思えば、感激と歡喜が油然而し

て湧き起り、心中に大きな拠点を与えられたように思われ、自信満々勇氣百倍するという現状となりました。

こうした私の感激と印象を将来に残す為め、この老叟にお直々御一筆の御教化をとお願を、この兩先生に差上げたのでした。然るに小野先生からは頂くの光栄を得ませんでした。竹中先生から早速にありがたい御書面を頂きました。其の中に法然上人の御法語として、

生ければ念仏の功積り
死なば浄土に参りなん
とにもかくにも此の身には
思ひわづらふ事ぞなきと思ひぬれば
死生ともにわづらいなし

―勸修御伝―

この先生の御書面が、八月二十九日に、お認めになったものです。それを私の手に頂いたのが八月三十一日午前十時半でした。私はこの春以来腎臓を患い母屋の西にある、ささやかな草庵の中で静養していました。この上人の御法語がひどく胸をうちまして幾度もいくたびも、読んでは頂き、いただきましたは読みながら、何んとかく心平

らかならざるものがあるように思われました。午後になっても、この御法語を手からはなすことができませんでした。

何んぞ計らん夕刻一大閃光というか、轟然たる爆音というか、果たまた、青天の霹靂というか驚天動地というか、いかなる形容を以てしても及ばぬ大事件が襲って来たのです。

「お祖父ちゃん、とうちゃんが……」

「何、とうちゃんがどうした？」

その時既に嫁と二人の孫と三人相抱いて泣き叫んでいるではありませんか。

「どうしたというのだ、何、汽車にはねられた、白い靴をはいていた、身分証明書を持っていた、内の父ちゃんにちがいないのだから。」

「そんな馬鹿なことがあるか！」

「お祖父ちゃんがいる、皆しっかりせい。」

と激励の言葉を出しては見ましたが、眼の前は真暗になって、全身の血が一時に逆流せんばかりでした。唯呆然として、泪一つも出ませんでした。

私の一人息子の仲は、山口大学教育学部防府分校に勤めていました。夏期休業中に

もかわらず、毎日出勤して学生の指導に当たっていて帰途魔の蹈切にさしかかったとき、不慮の災難に罹ったのです。

あの白骨の御文章に言わく「夫人間の浮生なる相をつらつら観ずるにおほよそかなきものはこの世の始中終まぼろしのごとくなる一期なり云々」宜なるかな今朝宅を出るとき、元氣よく出ましたが帰宅したときは、炬に納められた一個の遺体でした。

竹中先生より頂いた、法然上人の御法語が今となっては、み仏よりの暗示であったでしょう。あの時我身に迫る不安が予知せられてあればと感慨また無量です。一寸先きは闇の夜、これが凡夫の正体です。唯お念仏一つです。若しお念仏一つで解決できないとすれば、それは凡夫の愚痴です。それだけ積んでも、どれだけこぼしても全く無駄です。

私の今日の心境はと、人様に物語り、或は筆にすることになれば以上のような、頗る簡単に極めてあっさり割り切ったものとなりますが、それは大きな大きな嘘で、腹でも起きて朝から晩まで、晩から朝まで、煩惱の炎はもえ続けており、その愚痴

は、煩悶、焦躁、悲痛と発展し、自分で自分のこの胸の中をどうすることもできませぬ、あわれさです。せめてその一部分でも、その愚痴を聞いてやって頂けば又多少なりと胸の中がはぐれます。

「梓よ、お前があの奇禍に遇いかけた大きな災難も、今日となつては既に一年に近い昔となつた」

親よりよと互に語り合つたことも、想えば過去のことと、唯涙の種である。今日では智健居士である。お浄土の蓮華の台の上に座している。菩薩ではないか、あの当時「山口大学教育学部防府分校田村健太郎先生に對し生前の功績を称えらるる意味を以て賞勲局より木杯寄組を賜わる」旨放送されたなぞ破格の御恩賞にも接しました。これも矢張り涙の種です。告別式の時大学御当局より御鄭重な御取扱、諸先生や一般の方々から溢るる御同情をお寄せ下さつたことなぞ、遺族達に對する深い印象であります。

友人某書を寄せて曰く

黄梁炊夢百年短、青史是非千幾長

私はその頭に次の二句を置きたいと思ひます。

人生行路一睡夢、男兒須大道調歩

智健居士よ、居士は桑の山の東麓、防府中学に学び、次いで銀杏城下、白河畔に最後の仕上を成して東上、人生要務の發足をした。

次いで、南方地区に勤務し、命拾ひして帰郷、因縁消き桑の山、今度はその西麓の青年師範、次いで山口大学にと勤むる身となつた。桑の山、桑の山といへば、明治維新当時、志士墳墓の地、望東尼のゆかりの地、居士も亦矢張りこの桑の山がなつかしかったのか、この世を去る二十分前まで、その西麓の学校の研究室に頭張り、端然としてその日の日誌を認め、抽出に納めて学校を出発した。斯くしてあの魔の蹈切にて鉄路を枕に懐かしい桑の山を眺めつつ永久に安らかにこの世に暇を告げたのであります。

呼桑の山 呼桑の山

長跪合掌敬て白す

本稿は私の家に起つた不慮の災難を中心として書いたものです。不慮ということとは、お互凡夫の言葉であつて、私の道から見らるるときは、遠い遠い宿昔の因縁で、浮世なる人間世界ではどうすることもできないのです。

竹中先生とは全然未知の間柄である。それが朝の御放送が御因縁で結ばして頂く一つの手がかりとなりました。この偶然の動機がだんだんと進んで参る内、その偶然は必然的のものであつたということを知らされたのであります。涙なくして考えられぬことです。み仏のお慈悲が先生を通して、梓健太郎の姿をお暇迄のその刹那に伝えて頂きました。定めし梓も闇黙の中にこの尊い御教化をおし頂いてお念仏したことでしょう。ありがたいことです。こうした経緯からこの大きな災難と限りなき悲痛の中にも、遺族の若達が一抔の安心感を覚え気分

的のはぐれが又真に偉大なるものでした。かくの如くこの深甚なる感激と、刻みつけられたこの印象は絶対に永久に忘れることのできぬことであります。仍つて茲に内容貧弱不備の語句を列ね一文となし、尊い宿昔の御因縁に帰命稽首し、竹中先生冀くは御法林に御自重、愈々御健祥にして、大衆御教化の爲め、御挺身あらせられますよう、偏に御祈念申し上げます。

合掌南無阿彌陀仏

昭和三十三年七月二十八日

八十一 奥田村健治誌

まぼろしの城

インドのある遠い所に、世にも珍らしい宝のかくされているところがあった。そこへ行くには、五百由旬という長い間の險路惡道をこえて行かねばならず、しかもその道は、人里遠く離れていて、その間には一滴の水も、一本の草木もなく、ただ兇暴なけもの、群をなして棲んでいるほかには、何ものもないという、そこへ行く者にとって、これ以上に難儀な場所はない。

ある時、大勢の人達が集まって、この險阻な道を越して、珍らしい宝のところへ行こうと相談した。幸いその中の一人に、この通路によく通じている案内者がいたので、一行は大いに元気がついて、直ちに仕度して出発した。

やがて、その險阻な道にさしかかった。と

ころが、この道がまた聞きしにまさるけわしさなので、疲れ切った人の中には、弱音をあげる者が出て来た。

もう、私たちは疲れ切って、一歩もすめない。ここで休んでから、引かえすから、行ける人は行って下れ」

案内者は、折角ここまで来て、珍らしい宝物をみずに引かえたのでは、今までの苦心も水の泡になることで、余り気の毒だと思つたので、神通力を以って、三百由旬をすぎた險阻な道のほとりに、一つの大きな城を現出せしめた。そして、そこに坐つて動こうともしない人々に、指し示めしながらいった。

「さあ、みなさん御覧なさい。あすこに、

立派なお城がみえます。あすこには、おいしい飲物や食物が沢山ありますからゆっくり疲

れを休めて下さい。そして元気を回復させて宝物のあるところへ参りましょう」

弱音をはいた連中も、はるかにみえる幻しの城をみると、急に生きかえったように元気になって、

「そうだ。あすこまで行けば、ゆっくりと休めるんだ。行こう、行こう」

と、今度は、われ先にと歩いて、歓声を上げて城の中へ入って行った。みると、城の中には金殿玉楼がいらかをならべており、庭園には五色の水をたたえた池、林には妙音を奏でる鳥の声。全く、極楽の有様ながらであり、飲食は卓に山盛り、浴みする浴場には香水があふれている。一同は、全く夢の国に遊ぶ心持ちで、たちまちのうちに、空腹も、疲れも癒えてしまった。人々は、余りの楽しさに、もう、目的地にでもついてしまったかのように、一向に腰を上げそうにもない。

そうした有様をちっとみていた案内者は、一行の者が全く元気回復したのをみきわめると、忽ちに、幻の城を吹き消して、云った。

「さあ、皆さん、出かけよう。今の城は、皆さんを休ませ、元気を回復させるために、

仏教ものしり帖

布施

梵語でターナといい、音字で陀那・檀那などと書き、訳して施とす。その意味は、無貪の心（むさぼりのない心）を以って、仏と僧、及び貧乏で困っているものに、衣食等を施与することという。元来は、釈尊が仏教を信する在家の者の修業の一として、えらい坊さんや貧困者に物を施与することを教えられたのであるが、これが、六波羅密（仏道修業の六つの道）の一つとされるようになる、在家だけでなく、出家達にとっても、重要な修行の徳目となった。そして、種類も非常に多くなった。法施、財施、淨施、不淨施、無畏施、筆施、墨施、経施等々である。

この中で、財施というのは、財産や衣食を布施することで、これが本来の布施である。そもそも布施の布は、ひろくという意味と、布（ぬの）という意味と両方がふくまれているのである。そして、これには、一般在家の者が僧侶にするものである。これに対して、法施というのは、法すなわち仏の教えを、諸人にわからせることで、これは、僧侶が在家の者に対してなすのが普通である。このようにして、布施は、むさぼりの心なしに、真実に仏の教えを求めるものが、相互に助け合い、融通し合って行くことにほかならない。

現在では、僧侶の読経・供養に対して在家の者が財物・金銭を提供する場合のことをいうのに布施という字を用いているが、これはいうまでもなく布施の中の財施である。そして、檀家の者は寺でお経をきき、説教をきくことによつて、法施を得て帰るのである。しかし、これは目にみえず、気づきにくいことであるが、是非心がけて各自、何か心のかてになるものを持って帰ってこそ、本当の参詣ということが出来るのである。

布施の額は一定しないが、みえや外間を飾らぬ限り、多い程よろしいわけだ、但し分に応じた程度にとどめるべきである。ついでながら、布施の梵語ターナは、漢字で檀那と書き、これが變つて「吳那」となった。吳那とはお金持ちの主人公という意味のようだが、本来の意味は、布施をした人はすべて檀那であり、また常に自分の出入りする寺を法施をうけるといふ意味で、檀那寺ともいう。

私がかりにあらわした方便の城だったのです。宝のある町は、もうすぐです。元氣を出して、出かけましょう」

これをきいて、一同は今更のように、自分達の目的を思い出し、元氣に出発し、無事に、世にも珍らしい宝物を見ることが出来たのである。

案内者は仏であり、旅行者は私共衆生である。珍らしい宝物とは「悟り」であり、險阻な道とは、生死流転の煩惱の世間である。私共は、大きい菩提の成果を求めて、仏道を修行するが、往々にして、世のわずらわしさに妨げられて、途中で、へこたれてしまいがちである。そうした時に、仏は、方便即ちかりの手段を用いて、私共を小さな満足に導いて下れる。世によくいう現世利益がこれである。お金が儲かった、病気がなおったというのはみんな、かりの方便、まぼろしの域にすぎない。そこに居坐つて、それ以上に進もうとしないのは間違っている。そうした方便の助けを借りて、元氣を回復して、再び仏道の目的地へ、つきすすむべきでこそある。

法然上人をめぐる人々 (二)

——寂空上人と顕真法印——



井川定慶

一、愚鈍念仏

の浄土行易の法門が見つかったと思へば、研究は決して無駄ではなかったという御述懐を察せらる。

法然上人の一枚起請文に「無智の輩に同じうして」と記されているし、五重相伝の最初に当って「愚鈍念仏が第一等だ」と論される。してみると浄土宗は学問研究を拒否する教えなのでしょうかと一往疑うものがある。ところが上人の御言葉の中に「習ひあつめたる智慧は往生のためには要にもたつ可らず。されども習ひたる甲斐にはかくの如く知りたるは計りなき事なり」(念仏問答集)というのがある。

上人は十五才で出家剃髪され十八才にして現に天台宗切つての秀才とうたわれるに至っている。浄土の末流がほめるのは割引きして聴く必要もあるうが鎌倉時代の随筆集である「古今著聞集」には「源空上人はたゞ人にはおはせざりけり、弥陀如来の化身とも申、勢至菩薩の垂迹とも申す云々」とあり、日蓮聖人でさえも

換言せば学問や研究する事が往生の条件ではない。然し研鑽の功を積んだお蔭で此

「日本国には法然上人浄土宗の高祖なり。十七才にして一切経を習ひ極の天台六十巻に渡り、八宗を兼学して一代聖教の大意を得たり、天下無雙の智者、山門

第一の学匠なり」とはめている程である。

此の秀才が持室房源光、皇円阿闍梨、黒谷の寂空と師事し更に南部、醍醐、嵯峨御室へ、求道と教学研究の為に遍歴の旅を続けても満足し得ず、遂に止むなし廿四才から四十三才の浄土開宗まで黒谷の一切経蔵に閉ぢ籠り専ら釈尊の説き遺された教法に自主的研鑽を積んで行かれるのである。

上人の研究は尚お続いた。「われ聖教を見ざる日なし。木曾の冠者京洛乱入のときたゞ一日見ざりき」と歎ぜられたのは寿永二年七月であるから上人五十一才の時である。秀才にして尚おかつ努力せられたなればこそ上人の教学に対しての蘊奥ははかり知れないものである。

二、師僧が弟子となる

そこで師僧寂空上人との論争が二回行われている。即ち念仏は観仏か、称名かという一件である。上人は「称名勝れたり」と善導大師の釈義をもち出して譲らず、師匠に向い「聖教をよく／＼御覧給はで」と、お師匠さま御談論なさっても駄目です(勸

修御伝」と云い放っている。

また戒体論についても上人は「性無作の仮色」をもって対せられた。立破再三に及び遂に師僧の慧眼房叡空腹を立て一時は木枕を振り上げた程であったが流石は学僧慧眼房。自分の部屋に籠って経論を再検討すると法然房源空の云うとおり「天台大師の本意であつて。一実円戒の至極を云い表してゐる」というので、遂に師僧叡空が謝つて来、それから後には法然房の弟子分になられたという。かくて比叡山でただ一人伝授されていた大乘円頓菩薩戒の正統が叡空上人から法然上人に伝授されることになつたのである。

三、大原談義

後には天台の座主に推挙せられたほどの大徳顕真法印が、或る時坂本で法然上人に出あつて法印が、

「あなたは大本師でありますから、此の生死苦界を解脱する法門を定めて御存知でせうからお示し下さい」

と言われたが謙虚な上人は「自身のために聊か思い定めてもいますが、浄土教の信

仰です。あなたの如き大徳に今すぐ申上げてよいものかどうかしら」ということであつた。

顕真法印は極めて真面目な求道者でもあつたので、大原に百日の間籠居して浄土教に関するあらゆる書物を披閲しておいて、礼を厚くして法然上人を文治二年の秋に大原勝林院に迎へられた。所謂大原談義である。上人は顕真法印を始め当時の叡山学僧を前にして善導大師の釈義、浄土三部經の奥旨を説き現在の衆庶の救済される法門はただ口称名稱の念仏門より他にはないとハツキリ云い放たれたのである。

満座の大徳みな情伏し「かたちを見れば源空上人であるが、まことは弥陀如来の応現か」と感歎せられたという。かくて顕真法印が先登に立ち香炉をもち高声念仏し乍ら本尊阿彌陀仏像の周囲を行導すること三日三夜に及んだという。

法然上人のところへは先輩、同僚、後輩と学僧の幾人かが数多く訪ね来て教えをうけて弟子の礼をとっている。

四、謙虚な法語

さて大原談義とは、今で云うなら仏教学会である。或は浄土学会と云つてよからうか。其の席上の論争において法然上人が勝つたと云うのは新しい浄土宗学が認められたと云うことである。当時として随分名譽であつたであろうが、「法門は牛角の論であつた。ただ機根比べに勝つたに過ぎぬ」と上人はいう。天台や真言、華嚴、法相の旧宗と私の新しく立てた浄土宗と比べてみてどちらが勝れているわけではない牛角對等である。ただ強いて申せば浄土宗の教えは現代の人々が実行出来るという機根論に勝つたとても申しましようかなアというのであつた。

師僧の慧眼房叡空を先づ説き伏せ、更に転じて奈良で法相宗の碩学義俊、醍醐で三論宗の寛雅、御室で華嚴宗の慶雅に教えを求めて都へ教え乞はれる立場になつた。そして顕真法印を主賓とした大原談義に於て信伏を蒙つたのである。上人は方いわば當代第一級の学問僧であつた。

(知恩院教学部長)

和訳 歎仏頌「光顔ぎぎ文」

- 1、世自在王の御光りは勝れて等しきものぞなし、
- 2、摩尼の宝珠や日も月も光りを隠して墨のごと、
- 3、輝く御顔世に超えて覺りの御声十方に所ゆ、
- 4、その戒しみると定めさと智えの威徳は類いなし、
- 5、広き法海善く念じ奥をも底をも究め尽し、
- 6、貪り怒り愚ちのなき仏は人の雄なるぞ、
- 7、救いの功勳深き智え秀でし姿世を震う、
- 8、王の如くに我もまた早く迷いを脱るべく、
- 9、施し調え戒しみて忍び勤めん良き智えに、
- 10、仏を得るまで斯く誓う恐るる者を安らめん、
- 11、たとい仏は千億万聖の数は多くとも、
- 12、之を供養し崇むより道を求めて退ぞかず、
- 13、譬わば数多御仏の計り得もせぬ国々に
- 14、恵みの光りさしのべて教うちからの極みなさ、
- 15、仏と成りし、我國も人も覺りて第一に
- 16、快樂も並びなからしむ世の諸人を哀れみて、
- 17、来たれる者は心純み
- 18、世自在王仏知り給え願いを發して力むるを、
- 19、十方の仏もあきらかに我心ばえ知ろしめせ、
- 20、よしや身を苦に止むとも行を勤めて悔えざらん。

(吉田定久意訳)

会員だより

維持会員

京都 岸 信 宏様
神奈川 宮島 了道様

新規会員

大阪 安本 麻太郎様
広島 岩田 恒男様
佐賀 西岡 千代様
愛知 伊藤 秀戒様
長崎 西牟田 忠男様
津上 久五郎様
江崎 サタ子様
富永 きと様
門口 静子様
佐々木 辰美様

(小田義海様紹介)

大阪 葉 師 寺様

安 養 寺様

尾 形 様

宮崎 草場 崇 殿様

酒井 真 亨様

綾 様

阿 弥 陀 寺様

和歌山 専 光 寺様

福岡 荒牧 浄海様

三重 西山 繁雄様

兵庫 佐野 慶運様

神奈川 乃美 堯界様

推野 一 郎様

佐賀 田中 雄六様

山口 広 雲 寺様

願 王 寺様

支部通信

茨城 専修寺(二十名)

代表者 村上 博了様

埼玉 円心寺(二十名)

茨城 常林寺(二十名)

大阪 大光寺(二十名)

代表者 三枝樹正道様

広島 浄園寺(二五名)

東京 伝通院(三五名)

大河内隆弘様

西福寺(二五名)

成田 良穂様

福井 善導寺(三十名)

大門 俊我様

東京 講安寺(二五名)

池田 立基様

青森 青岩寺(七名)

東京 浄心寺(十名)

京都 家政学園(十二名)

「浄土」購読規定

一部 定価 金四十円

(送料 四円)

会費一万年 金四八〇円

(送料不要)

浄土 十月号

昭和十年五月廿日
第三種郵便物認可

昭和三十三年九月廿五日 印刷

昭和三十三年十月一日 発行

定価 四十円

編集人 竹 中 信 常

発行人 佐 藤 密 雄

印刷人 神 谷 秀 雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人顕仰会

振替東京八二一八七番

◇◇信仰の歩みを進めるために◇◇

新刊 浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B六版・十六頁
定価十五円八角

目次

1. 大慈悲の仏教
2. 知性を超えて
3. 美的情感を超えて
4. 本願の不思議にて
5. すべてを包む愛
6. 人生は信ずる心から
7. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二十円八角

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. 流れゆくもの
3. なやまとまよいのもの
4. すでに救われている
5. 信ずるところ
6. 仏を思う
7. 新しい生活
8. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

童話学入門

最新刊

B 6 360頁 価480円 50円

日本童話協会理事長
駒沢大学文学部講師
東京高等保育学校長

内山憲尚著

- ◎童話学は童話の基礎である。童話を話す人、童話を作る人、子供に話す人、幼稚園、保育所の先生、小学校教諭、日校こども会の指導者、児童教化に携わる人の知っていなければならない基本的なものです。
- ◎内山憲尚氏は30年来、童話学の大切なことを叫んで来られ、各大学や講習会等で講演されたり、研究された資料を整理してこの“童話学入門”を出版されました。

新宿区西大久保1-400

発行所 東京文化研究部出版部
取次所 日本童話協会